

エジプト学研究第 18 号 2012 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
第 4 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・西坂朗子・高橋寿光	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第 16 次・第 17 次発掘調査—	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・馬場匡浩・西本真一・柏木裕之・秋山淑子	21
2011 年太陽の船プロジェクト活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	69
〈研究ノート〉		
両面加工石器製作の生産体制について		
—ヒエラコンポリス遺跡エリート墓地出土資料の分析から—	長屋憲慶	77
〈卒業論文概要〉		
岩窟墓の形態変化とアマルナ時代の影響	熊崎真司	85
〈活動報告〉		
2011 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		93
2011 年 エジプト調査概要		97
〈編集後記〉	近藤二郎	103

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Preliminary Report on the Fourth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian ExpeditionJiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI		5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Sixteenth and Seventeenth SeasonsSakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Masahiro BABA, Shinichi NISHIMOTO, Hiroyuki KASHIWAGI and Yoshiko AKIYAMA		21
Report of the Activity in 2011, Project of the Solar BoatHiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA		69
Articles		
Bifacial Flint Production Groups in the Predynastic Egypt: Analysis of finds from Elite Cemetery at Hierakonpolis	Kazuyoshi NAGAYA	77
Summary of the Recent Undergraduate Theses		85
Activities of the Society, 2011-12		93
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2011		97
Editor's Postscript	Jiro KONDO	103

調査報告

エジプト ダハシユール北遺跡発掘調査報告 — 第 16 次・第 17 次発掘調査 —

吉村 作治*¹・矢澤 健*²・近藤 二郎*³
馬場 匡浩*⁴・西本 真一*⁵・柏木 裕之*⁶・秋山 淑子*⁷

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Sixteenth and Seventeenth Seasons

Sakuji YOSHIMURA*¹, Ken YAZAWA*², Jiro KONDO*³,
Masahiro BABA*⁴, Shinichi NISHIMOTO*⁵, Hiroyuki KASHIWAGI*⁶,
and Yoshiko AKIYAMA*⁷

Abstract

The mission from the Institute of Egyptology, Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as field director, conducted fieldworks at Dahshur North in 2008 (16th) and 2009 (17th). In these seasons, the excavations were continuously concentrated on the area around the Ramesside tomb of *Ta*. Thirteen shaft tombs were investigated, most of which were located on the area to the north of the tomb of *Ta*.

The most notable find in these seasons were the burials of *Iry-sr-ꜥ3* and *T3-wb-p3w-m3ꜥt* at Shaft 110. Although already plundered, their wooden coffins were found, and the restoration works revealed that each was buried in the double anthropoid coffins. In addition, there were retrieved four complete shabti boxes filled with 12 to 14 wooden shabtis and three wooden canopic jars still containing organs as well as a complete amphora. The wooden shabti boxes and the amphora show that the burials date to the 20th dynasty.

As for the other New Kingdom tombs, in Shaft 68, the re-used door jambs belongs to *Pth-m-wi3* were found. In Shaft 109, the almost complete wooden anthropoid coffin was unearthed. The coffin has the features of yellow background and quite flat lid, suggesting that the burial could date to the late Ramesside Period.

The Middle Kingdom shaft tombs were also found. All of the tombs have already been disturbed, but they still contained the notable burial equipment. Some of them contained a number of “Beer bottles”, which is typical in the Middle Kingdom pottery repertoire and useful dating criteria. Most of them were date to the early 13th dynasty. In the burial chamber of Shaft 107, nine complete bottles were found *in situ*. From Shaft 79 three small animal figurines and fragmental figure of a hippopotamus were revealed.

The discoveries of this season added more information for the nature of the activity at the western part of the cemetery. Shaft 110 offers an convincing evidence that this cemetery continued to have been used until the 20th dynasty. With the previous excavations, the result could be a great contribution on understanding of the burial practice in the later Middle and New Kingdoms in the Memphite Necropolis.

* 1 早稲田大学名誉教授

* 2 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

* 3 早稲田大学文学学術院教授

* 4 早稲田大学エジプト学研究所次席研究員

* 5 サイバー大学世界遺産学部教授

* 6 サイバー大学世界遺産学部教授

* 7 早稲田大学エジプト学研究所ボランティア

* 1 *Professor Emeritus, Waseda University*

* 2 *Invited Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*

* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

* 4 *Junior Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*

* 5 *Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*

* 6 *Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*

* 7 *Volunteer staff, Institute of Egyptology, Waseda University*

I. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所によるダハシュール北遺跡の調査隊は、1995年の新王国時代第18王朝末の「王の書記イパイ」という人物の「トゥーム・チャペル（神殿型平地墓）」の発見を皮切りに、「パシエドゥ」、「タ」のトゥーム・チャペルおよびその周辺に点在する数々の新王国時代の墓を発見してきた。2004年以降は「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に広がるシャフト墓、単純埋葬の調査を続けており、中王国時代と新王国時代の未盗掘墓が発見された。その後の調査で、この遺跡は新王国時代だけでなく、中王国時代の墓域も顕著に存在することが確認されるに至った。両時代の埋葬習慣の解明が、研究の主要なテーマとなっている。

2008年11月～12月に行われた第16次調査¹⁾、2009年6月～7月に行われた第17次調査²⁾では、ダハシュール北遺跡の墓域でも西端に位置する「タ」のトゥーム・チャペル周辺の様相を明らかにすることを目的として、「タ」墓周辺における発掘調査を継続した。本稿はこの2回の発掘調査の概要報告である。第16次調査では、シャフト110から新王国時代第20王朝に年代付けられる二重の人型木棺の埋葬が発見され、第17次調査まで発掘が継続された。残存状況の良い木棺とともに木製シャブティ・ボックスと大量の木製シャブティ、木製カノポス壺、アンフォラなどが完形に近い状態で発見されており、ダハシュール北遺跡のみならず、メンフィス・ネクロポリスにおける同時代の埋葬習慣を解明する上で重要な資料となる。また、2回の調査で中王国時代のファイアンス製品や土器が多数発見されており、ダハシュール北遺跡の中王国時代における活動時期や、埋葬習慣を知る手がかりを補強することができた。

II. 第16次調査

1. はじめに

「タ」墓を中心として、第15次調査までに南北40m、東西60mの範囲の平面発掘がおこなわれており、シャフト40（「タ」のトゥームチャペル）からシャフト104までの、計65のシャフトが確認されていた。第15次調査までにこの内の54基の発掘が完了している。第15次調査までの範囲では8割以上の墓の発掘を終えており、「タ」墓周辺地域の様相が明らかになってきたが、一方でこの地区の北側と東側にはまだ数多くの墓が存在していることが地表面からも推測できた。第16次調査では、「タ」墓周辺地域の墓域の広がりを確認することを目的として、発掘区を5m北側へ拡張し、遺構確認のための平面発掘を実施した（図1）。また、「タ」のトゥーム・チャペル上部構造の基礎となっている堆積の下からシャフト42（「セヌウ」墓）、シャフト64（「ケキ」墓）、シャフト65（「セバクハト」と「セネイトエス」墓）や土壙墓12y0006（「ウイアイ」墓）、12y0009（「チャイ」墓）などの未盗掘墓が発見されていることから（吉村、馬場他2009, 2010）、「タ」のトゥーム・チャペル南東部に残存していた堆積の除去を行い、遺構の存在の有無を確認した。墓の発掘については、全部で9基を対象として行われた（図1）。以下では、まず発掘区北側の平面発掘と「タ」墓南東側堆積の除去作業について述べ、次にシャフト墓の発掘作業について記述する。

2. 平面発掘

第16次調査では、調査区を北側へ5mを広げ、遺構確認のための平面発掘を実施した。発掘を実施したグリッドは2E47a、b、2E48a、b、2E49a、b、2E50a、b、3E41a、b、3E42a、bである。南北5m、東西60mであり、この範囲からシャフト105～111の計7基のシャフト墓が発見された（図1）。

3. 「タ」墓南東側堆積の除去作業

「タ」墓の上部構造の壁体は砂とタフラによる盛り土の上に築かれており、第10次調査には盛り土の北東部分を半裁する形で、10 x 10mの発掘区（3E21d、3E22c、3E31b、3E32a）を設定し、セクションの確認を行っ

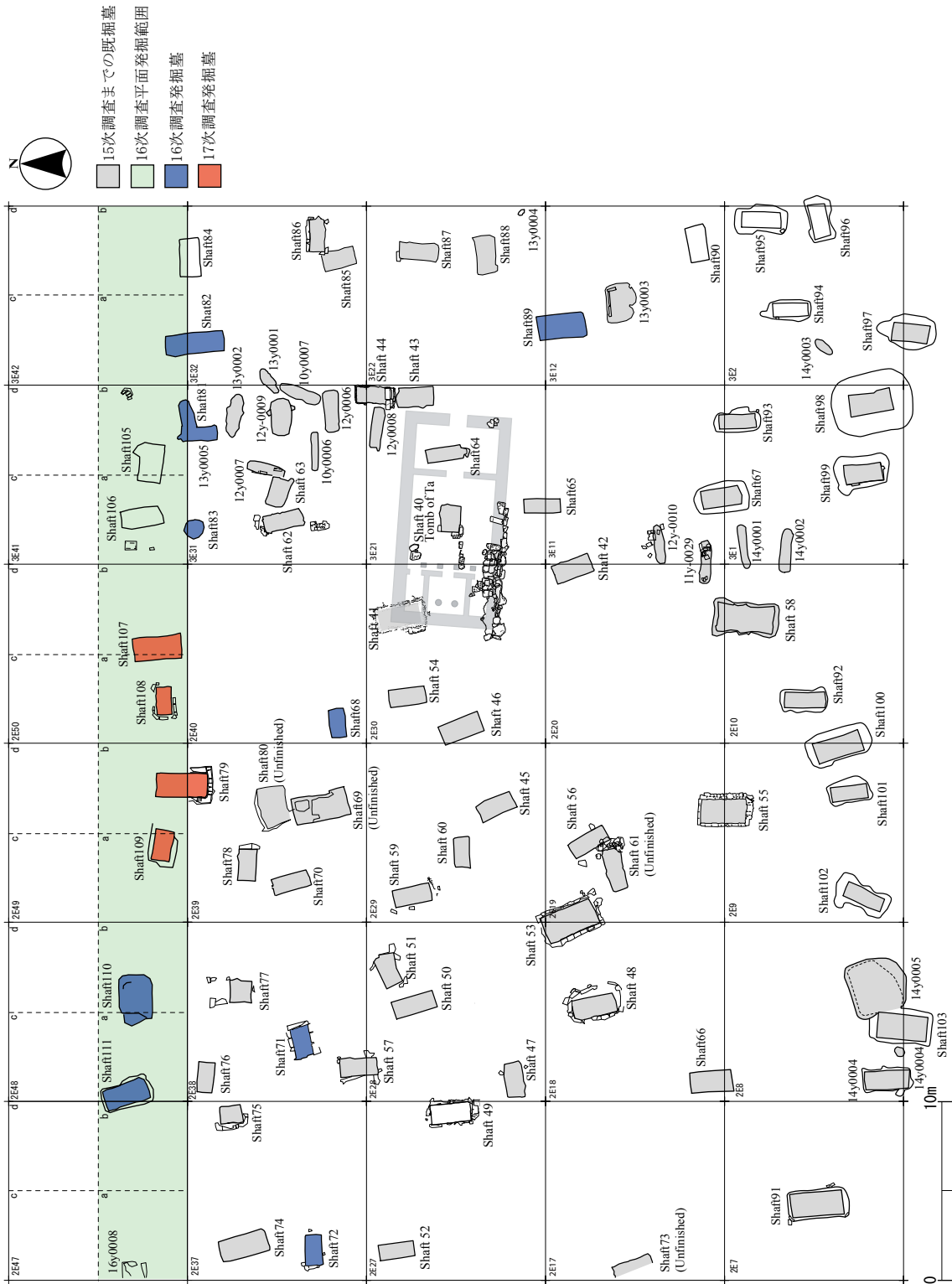


図1 ダハシュール北遺跡調査区
Fig.1 Map of the excavation area around the tomb of Za

ていた(吉村、馬場他 2009: 6-8, 図 1-3)。第 16 次調査では、3E22 グリッドの西面にセクションを設定し、以東の発掘を実施して、遺構の確認を行った(図 2)。その結果、図 3 のセクションで「灰色タフラ層①」(吉村、馬場他 2009、図 2 のセクションの灰色タフラ層⑤と対応する)から掘り込まれたピットが 6 か所で確認された(図 2, 16y-0001 ~ 16y-0006)。この内、16y-0001 と 16y-0002 の 2 つには土器片が充填されていた(写真 1)ピット 16y-0001 は径約 45cm、深さ約 40cm、ピット 16y-0002 は平面ではヒョウタン形であり、長辺は約 1.4m、短辺は約 80cm であった。前者の 16y-0001 からは、土器片とともに木製の芯にプラスターを塗布し、その上から彩色が施された人物像の頭部と左右の足部が発見された(写真 2)。その後岩盤まで掘り下げを行ったが、今回発掘を行った地点では堆積の下に墓は存在しないことが分かった。

16y-0001 から出土した木製彫像(写真 3)は本来胴部があったと推測され、頭部には胴部に差し込まれていたと考えられるほぞがあり、左右の足部はすねとの連結に用いられたほぞ穴がある。頭部、足部ともに木製の芯の表面にプラスターが塗布されており、その上から赤褐色の顔料が塗られていた。頭部は頭頂からほぞの下端までが 32cm、幅が 13cm、顔正面から後頭部までの奥行が 14cm であった。右足は長さ 25.5cm、幅が 8.7cm、

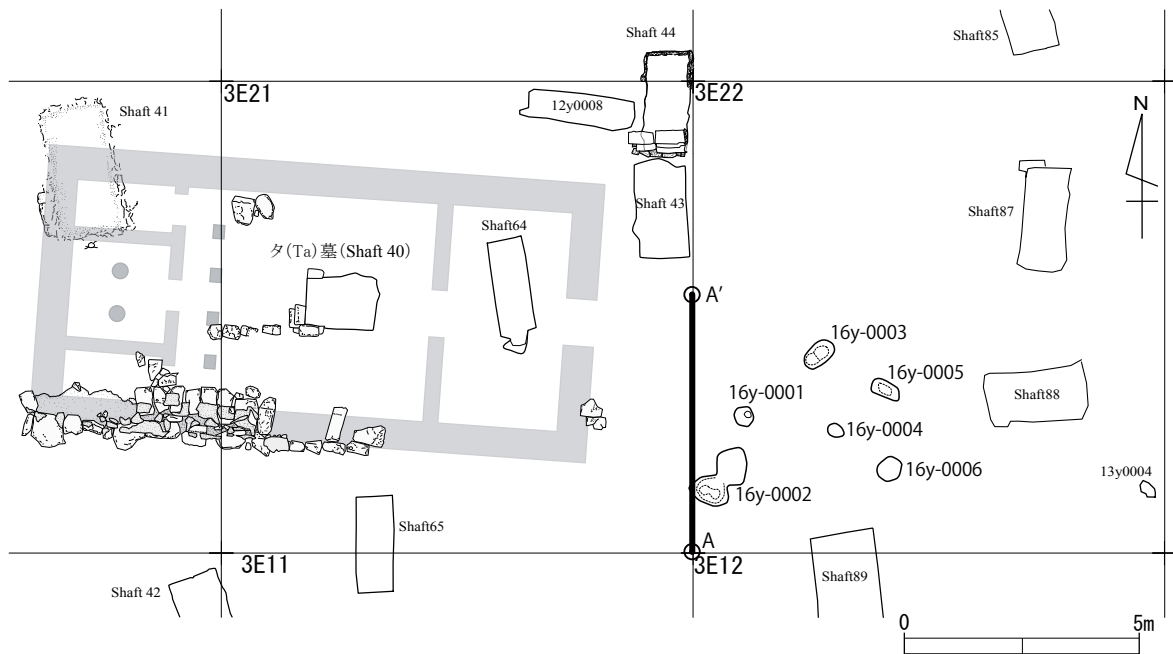


図 2 タ墓南東部のピット群
Fig. 2 Pits on the south-eastern area of the tomb Ta

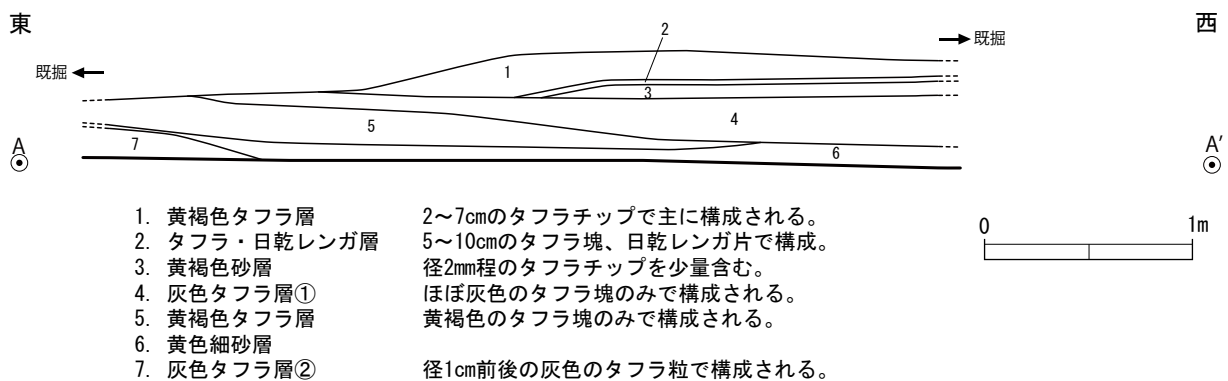


図 3 A-A' セクション
Fig. 3 Section A-A'



写真1 ピット 16y-0001 (右)、16y-0002 (左) 検出状況
Photo 1 Pit 16y-0001(right) and Pit 16y-0002(left) as found



写真2 ピット 16y-0001 内
木製彫像断片出土状況
Photo 2 Wooden statue inside
Pit 16y-0001

高さが 8.5cm、左足は分解していたが、おそらく長さ、幅は同じと推測され、高さは 7.8cm であった。

ピット 16y-0001 と 16y-0002 から出土した土器片の多くは壺形のものであり、接合できた例はほとんどなく、ピット 16y-0002 から出土した彩文土器 1 点のみ、完形に近い形へ復元することができた (図 4)。断面が涙形の彩文土器であり、口縁部がやや外に向かって開いている。外面全面にクリーム色のスリップが塗布され、頸部と胸部に 3 本の線状の彩色が施されており、両者とも黒色の線が赤褐色の線に挟まれる形となっている。胎土は Nile B2³⁾ である。赤と黒の 2 色による彩色は第 18 王朝初期から中期にかけて多く見られ (Hope 1987:



写真3 ピット 16y-0001 出土塑像
Photo 3 Wooden Statue from Pit 16y-0001

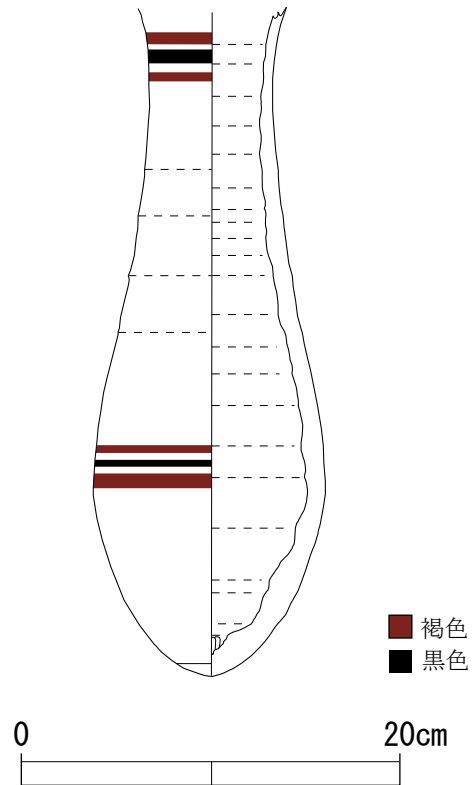


図 4 16y-0002 出土彩文土器
Fig.4 Painted pottery from Pit 16y-0002

109)、稀ではあるが第18王朝後期のマルカタ (Hope 1989: 7) やアマルナ (Rose 2007: 26-27) でも出土している。

ピットは「タ」のトゥーム・チャペルの盛り土に覆われる形で発見されたものの、埋納されていた彩文土器の年代は第18王朝と考えられることから、第20王朝に年代づけられる可能性がある「タ」の墓 (吉村、近藤他 2005: 117) の造営と直接は関連していないと考えられる。一方で、ピット群の東側に隣接しているシャフト88は第18王朝後期に年代づけられる埋葬が発見されており、上部構造を有していたことが指摘されている (吉村、近藤他 2011: 58)。第10次調査で確認された「タ」のトゥーム・チャペル東側の東西方向のセクション (吉村、馬場他 2009: 図2) でも、ピットが掘り込まれている層 (第10次調査セクションの灰色タフラ層⑤) はシャフト88の西側から3E22グリッドの西端ラインまで続いていることが確認されており、同グリッド西端ラインから約50cm西でこの層は途切れている。したがって、ピットが掘られた層は「タ」のトゥーム・チャペルの掘削廃土に由来するものではなく、「タ」の墓造営以前にあったもので、シャフト88の掘削廃土に由来している可能性が高い。ピットの位置がシャフト88の真西にあるという位置関係からも、ピットに像を埋納する活動が隣接するシャフト88と関連している可能性が考えられる。

像の頭や足をピットに埋納する行為としては、ミルギッサで呪詛の文書が書かれた像および中王国時代の土器片とともに、陶製の像の頭部と左足がピットの内部から発見された例がある (Vila 1963: 157-158, Fig.17.1, 4)。敵に対する呪詛として、敵の名前が書かれた像や土器片を割ることで、対象に害を与えるという儀式が行われていたと考えられており (Fuscaldo 2003: 186-188)、ピット16y-0001の例も、こうした儀式に関連していた可能性がある。土器に関してはほとんどが接合できなかったため、この場で割られたものではないと考えられる。木製彫像を土器の断片とともに埋める行為の意味については、今後も検討を要する。

4. 墓の発掘

第16次調査では全部で9基のシャフト墓を発掘した。遺構と出土遺物について、シャフト墓ごとに報告する。

(1) シャフト68 (図5)

シャフト68はグリッド2E40に位置し、2007年の第12次調査でシャフトの上部が確認された。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさは1.0 x 1.7m、シャフト部の深さは4.5mであった。シャフト部分は細砂で満たされており、深さ3.6m付近からレリーフ片が出土し、その下から人型木棺の蓋の断片が出土した。シャフトの最下部から西側に部屋が発見された (A室)。A室の平面は方形に近く、西面が東面より若干長い。南北が3.0m、東西が2.0mであり、床から天井までの高さが1.2mであった。部屋の入り口部分は細長い石灰岩の石材によって脇に柱を立て、その上に石灰岩のまぐさを渡して戸口を作り出していた⁴⁾。脇柱は床面を20cmほど掘り下げて埋め込まれており、脇柱、まぐさの表面には泥モルタルが塗られていた。泥モルタルを除去したところ、脇柱のA室内側を向いていた面には碑文が残っていることがわかった。碑文には「プタハエムウイア」という名前があることから、建材は再利用されたもので、本来は同人物のトゥーム・チャペルの礼拝室を構成していたと考えられる⁵⁾。

出土遺物

a) 人型木棺片 (図6-1, 2)

図6-1は人型木棺の蓋の足部分と考えられるもので、シャフト部から出土した。素足が表現されていることから、ミイラを表現したものではなく、生前の姿を現した着衣型の木棺であり、新王国時代第19王朝に類例が見られるものである (Niwinski 1988: 12-13; Taylor 1989: 38-39)。図6-2は人型木棺の蓋に取り付けられていた左側の手と考えられるもので、同じくシャフト部から出土した。

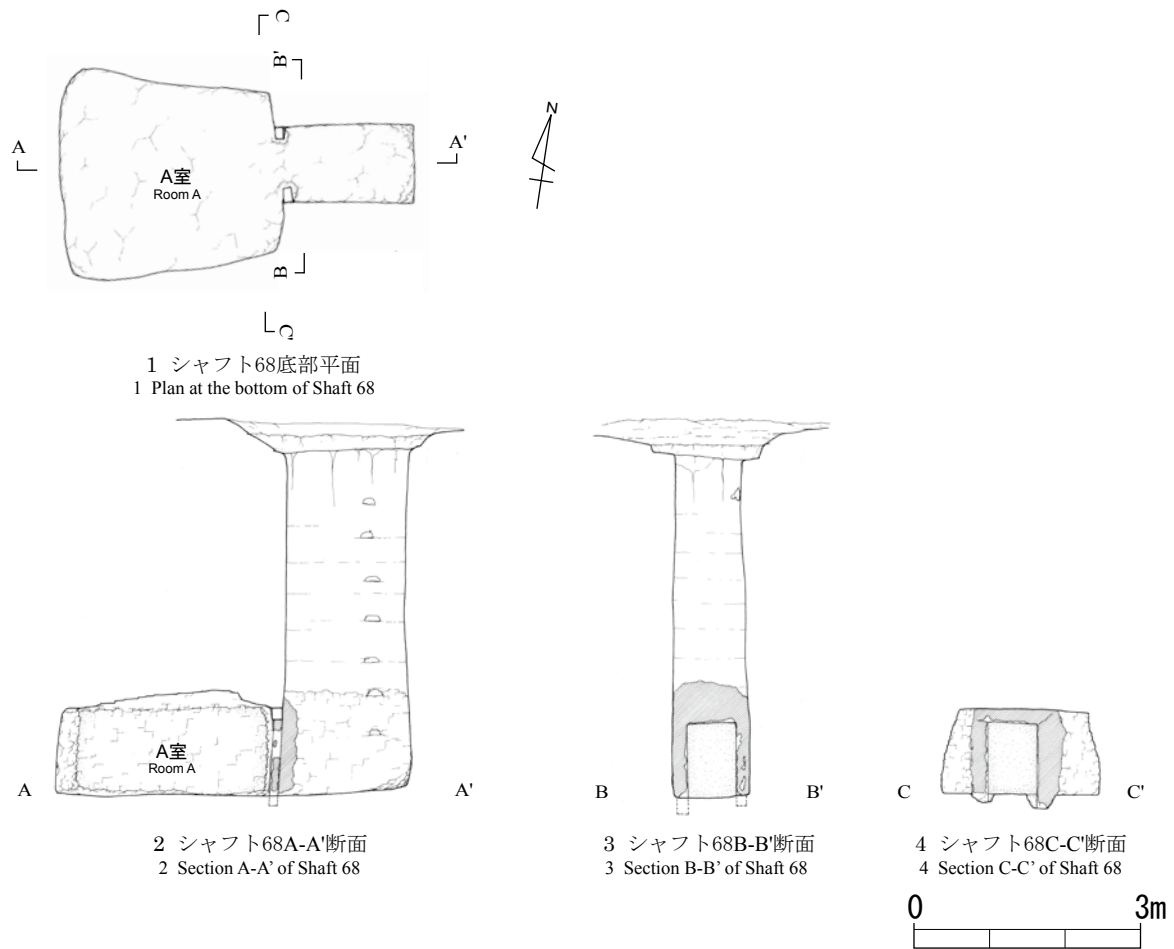


図5 シャフト68平面・断面図
Fig.5 Plan and section of Shaft 68

b) レリーフ (図7-3)

石灰岩製のレリーフであり、シャフト部から出土した。アーキトレーブの破片と推測され、上面と下面は整形されている。比較的深い陰刻で銘文が刻まれていた。

c) 脇柱 (図7-1、2)

A室の間口にあった脇柱は、本来は地上のトゥーム・チャペルの建材として使われていたもので、再利用されたものと考えられる。A室内から見て右側(南側、図7-1)のものは、長さ120cm、幅20.5cm、厚さ10.5cmであり、縦方向に一系列の碑文が刻まれていた。碑文の内容は次の通りである。

//// t. Mn-nfr di=sn ḥw 3w nn ḥ3t phw nn m kṛst nfrt n ḥm-ntr tpy Pth-m-wi3

「メンフィスの////、彼ら(神々)が、決して終わることの無い長い命を、大司祭プタハエムウイアの美しき埋葬において与えますように」⁶⁾

A室内から見て左側(北側、図7-2)のものは、長さ113cm、幅20.5cm、厚さ11cmで、同様に縦方向に一系列の碑文が刻まれていた。

//// drf di=sn prrt nbt ḥr wdḥw=sn ḥnkt rnpwt n k3 n ḥm-ntr tpy n Nt Pth-m-wi3

「//// 彼らが、ネイト大司祭プタハエムウイアのカーのために、彼らの祭壇から来る全ての物、供物と野菜を

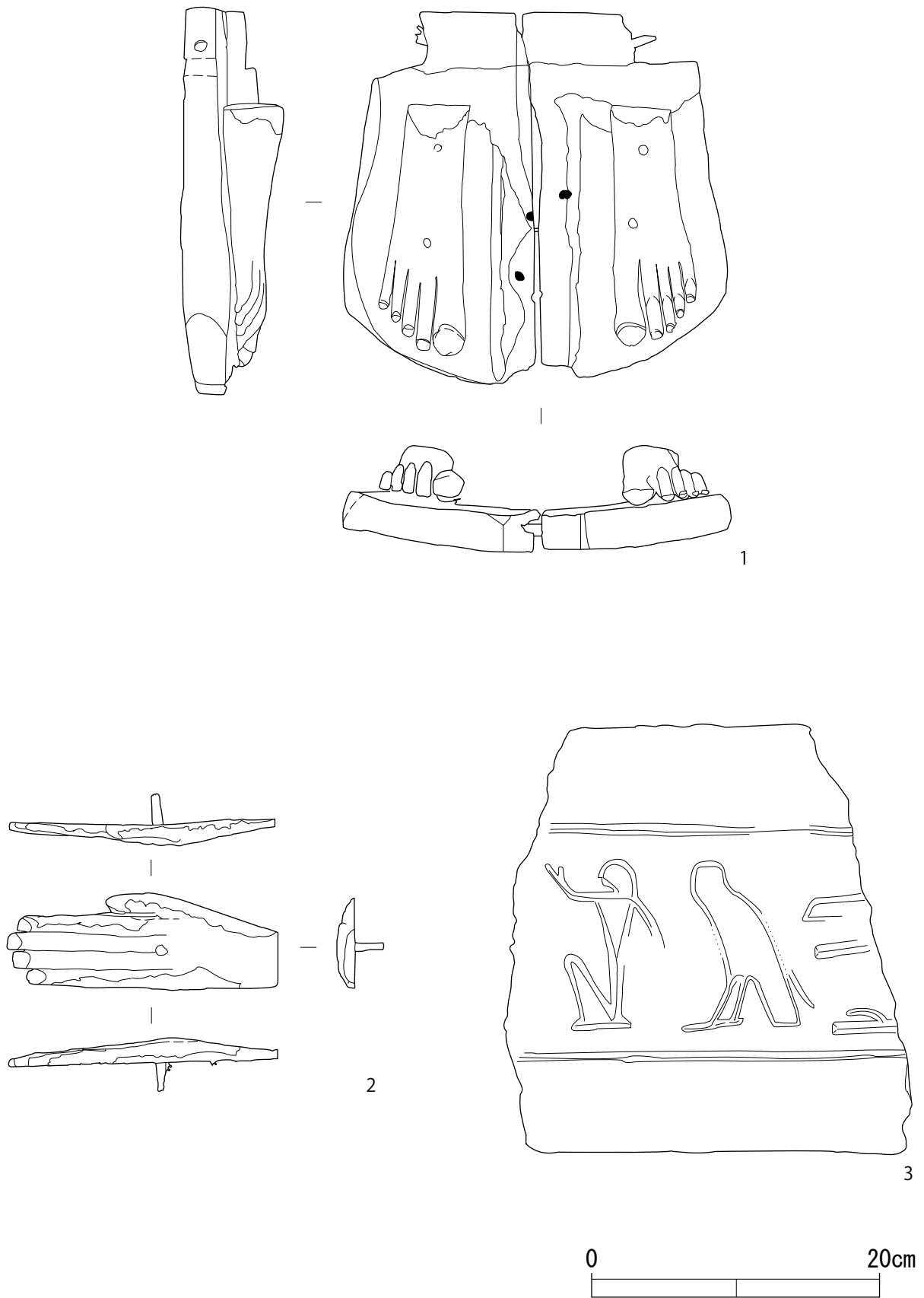


図6 シャフト68出土遺物(1)

Fig.6 Objects from Shaft 68 (1)

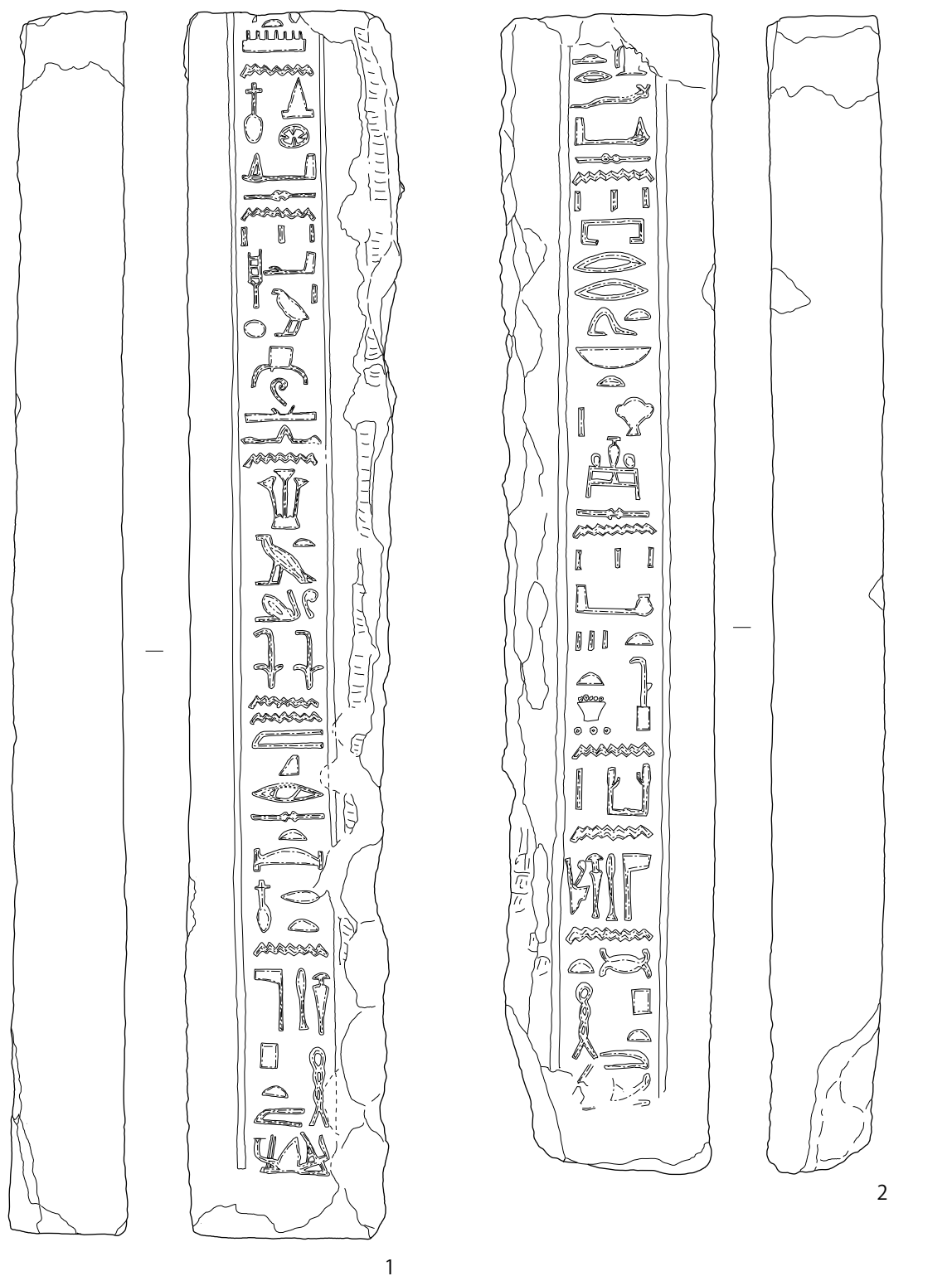


図7 シャフト68出土遺物(2)

Fig.7 Objects from Shaft 68 (2)

与えますように」

銘文は後半部分が残存するのみであるが、典型的な供養文であることは明らかである。これらはトゥーム・チャペルの礼拝施設を構成するものである (ex. Martin et al. 1985: Pls.7-8)。

(2) シャフト 71 (図 8)

シャフト 71 はグリッド 2E38 に位置し、シャフトの上部が 2007 年の第 12 次調査で確認されていた。シャフト開口部の長軸の報告は東西であり、開口部の平面の大きさは 0.8 x 1.6m、シャフト部の深さは 4.5m であった。シャフト部からは人型木棺の断片が出土した。

シャフトの最下部から西側に部屋が発見された (A 室)。A 室はやや東西に長い長方形であり、南北 2.5m、東西 3.5m、床面から天井までの距離が 1.0m であった。A 室からはファイアンス製のスカラベの指輪、ファイアンス製のウジャト形ビーズ、青、緑、黒、赤褐色によるファイアンス製の指輪が出土した。

出土遺物

a) 人型木棺片 (写真 4)

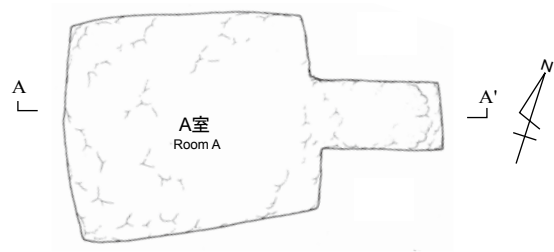
人型木棺の蓋の足部分であり、シャフト部から出土した。中央に銘文帯があり、銘文帯の部分は断面が弧になるようにわずかにくぼんでいる。全体が黄色で塗られ、銘文帯の左右の線と文字のアウトラインは赤色で書かれており、一部その上を青色で塗った痕跡が見られた。

b) ファイアンス製指輪 (図 9-1 ~ 11)

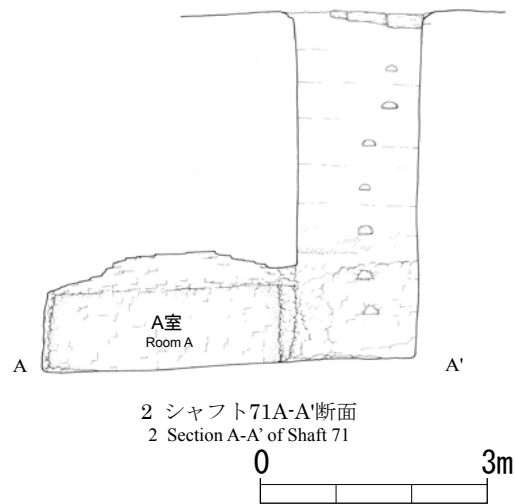
A 室よりファイアンス製の指輪 11 点が出土した。直径が 1.9 ~ 2.3cm、厚さ 3mm 前後であり、青色 (図 9-1 ~ 4)、緑色 (図 9-5 ~ 9)、黒色 (図 9-10)、赤褐色 (図 9-11) などの色があった。類例はサッカラでも見られ、第 18 王朝後期から第 19 王朝に年代づけられている (Schneider 1996: 49, cat.306; Martin et al. 2001: 47, cat.105)。

c) スカラベ形指輪 (図 9-12)

長さ 1.7cm、幅 1.2cm、厚さ 0.7cm のスカラベ形の指輪の一部で、中央のスカラベは緑色のファイアンス製であり、周囲は青銅の枠で覆われている。青銅の枠



1 シャフト71底部平面
1 Plan at the bottom of Shaft 71



2 シャフト71A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 71

図 8 シャフト 71 平面・断面図
Fig.8 Plan and section of Shaft 71



写真 4 シャフト 71 出土人型木棺片
Photo 4 Fragment of wooden coffin lid from Shaft 71

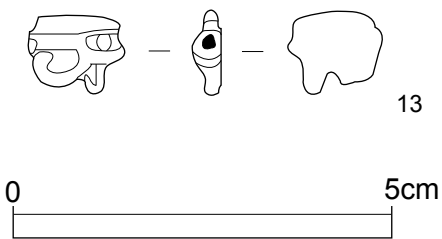
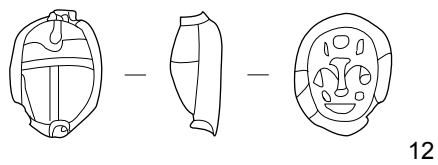
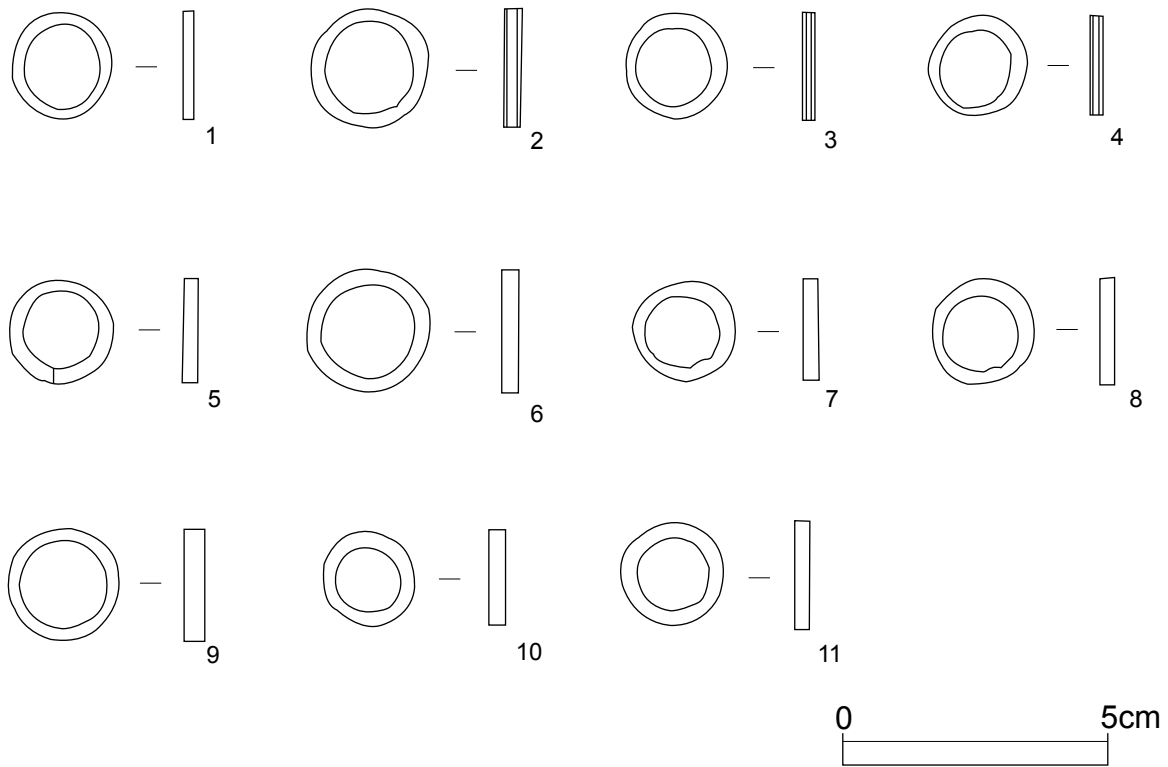


図9 シャフト71 出土遺物
Fig.9 Objects from Shaft 71

の一部には鍍金が残っていることから、本来は青銅の枠全体に鍍金が施されていたと考えられる。青銅部分の両端は指にはめるための環が付けられていた痕があった。同様の例としてはグラブの埋葬から出土しているものが挙げられる (Brunton and Engelbach 1927: Pl.XXIV-12, 13, 16, 17)。文様で類似している例としては、ハラガの新王国時代の墓から出土しているものがある (Engelbach 1923: Pl.XXI-141, 198)。

d) ファイアンス製ビーズ (図9-13)

高さ 1.1cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm のウジャトの眼を象ったファイアンス製ビーズであり、横方向に紐を

通すための穴が空けられている。類似する例はサッカラ (Raven 2005: 88, cat.179)、グラーブ (Brunton and Engelbach 1927: Pl.XLII-38D) などで見られ、前者では第20王朝に年代づけられている。

(3) シャフト72 (図10-1, 2)

シャフト72はグリッド2E37に位置しており、シャフトの上部が2007年の第12次調査で確認された。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、開口部の平面の大きさは0.8 x 1.6mであった。シャフト部は深さ1.5mであり、部屋はなく、埋葬に使用された痕跡も見受けられなかったことから、未完成のシャフトと考えられる。

(4) シャフト81 (図10-3 ~ 5)

シャフト81はグリッド3E31に位置しており、シャフトの上部が2007年の第13次調査で確認された。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、開口部の平面の大きさは2.0 x 0.7mだが、開口部の北東側に東西に長い溝状の掘り込みがあり、シャフト部の東面に達している。溝状の掘り込みは長さが約1.5m、幅は60cm、深さ50cmほどであり、日乾煉瓦が2点出土したのみで、埋葬の痕跡は発見されなかった。

シャフト81のシャフト部は深さ2.2mで底に達しており、埋葬室は発見されなかった。しかしながら、人骨、土器片、木棺片などが出土していることから、シャフト部への埋葬が行われていた可能性がある。

(5) シャフト82 (図10-6 ~ 8)

シャフト82はグリッド3E42から3E32にまたがっており、2007年の第13次調査の平面発掘で上部が確認されていた。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、大きさは3.2 x 1.1mで、他のシャフト墓と比べてシャフト部の平面が細長い。ファイアンス製のビーズがシャフト部から出土した。シャフト下部から南側に部屋が発見された(A室)。シャフト部の床面はA室の床面よりも約40cm低い。A室は平面が南北に長い長方形であり、長さ2.9m、幅1.1mで、床面から天井までの高さが1.4mであった。A室の東壁には奥行き0.8m、幅0.7m、高さ0.7mの壁龕が掘られていた。A室の西側は床面から約0.3mのところまで西方向に拡張されていた。中王国時代に典型的な大型の丸底壺形土器2点が拡張部分から出土しており、両方とも完形の状態で残っていた。A室からはファイアンス製ビーズ、杖の一部と思われる木製品片、土器、人骨が出土した。

出土遺物

a) ファイアンス製ビーズ (図11-1, 2)

図11-1はシャフト部から出土したもので、図11-2はA室から出土した。どちらも青色で、断面の形状が台形を呈する。同形のファイアンス製ビーズはハラガ、ラフーンの中王国時代の墓やリシュトでも出土している (Engelbach 1923: Pl.LI-61; Petrie et al. 1923: Pl.LXIII-61B2, 61C, 61C2; Arnold 1992: 66, 75, Pl.79-98, Pl.91-207)。

b) 木製品 (図11-3)

二又に分かれた形状の木製品で、ウアス (*w3s*) 杖の下端部と思われるものである。上端に穿孔があり、おそらく杖の枝の部分とつなぎ合わせるためのものと考えられる。墓にウアス杖を副葬品として配する例は数多くあり、中王国時代ではディール・アル＝ベルシャのジェフウティナクト墓などが挙げられる (Freed et al. 2009: 141, 図.99)。

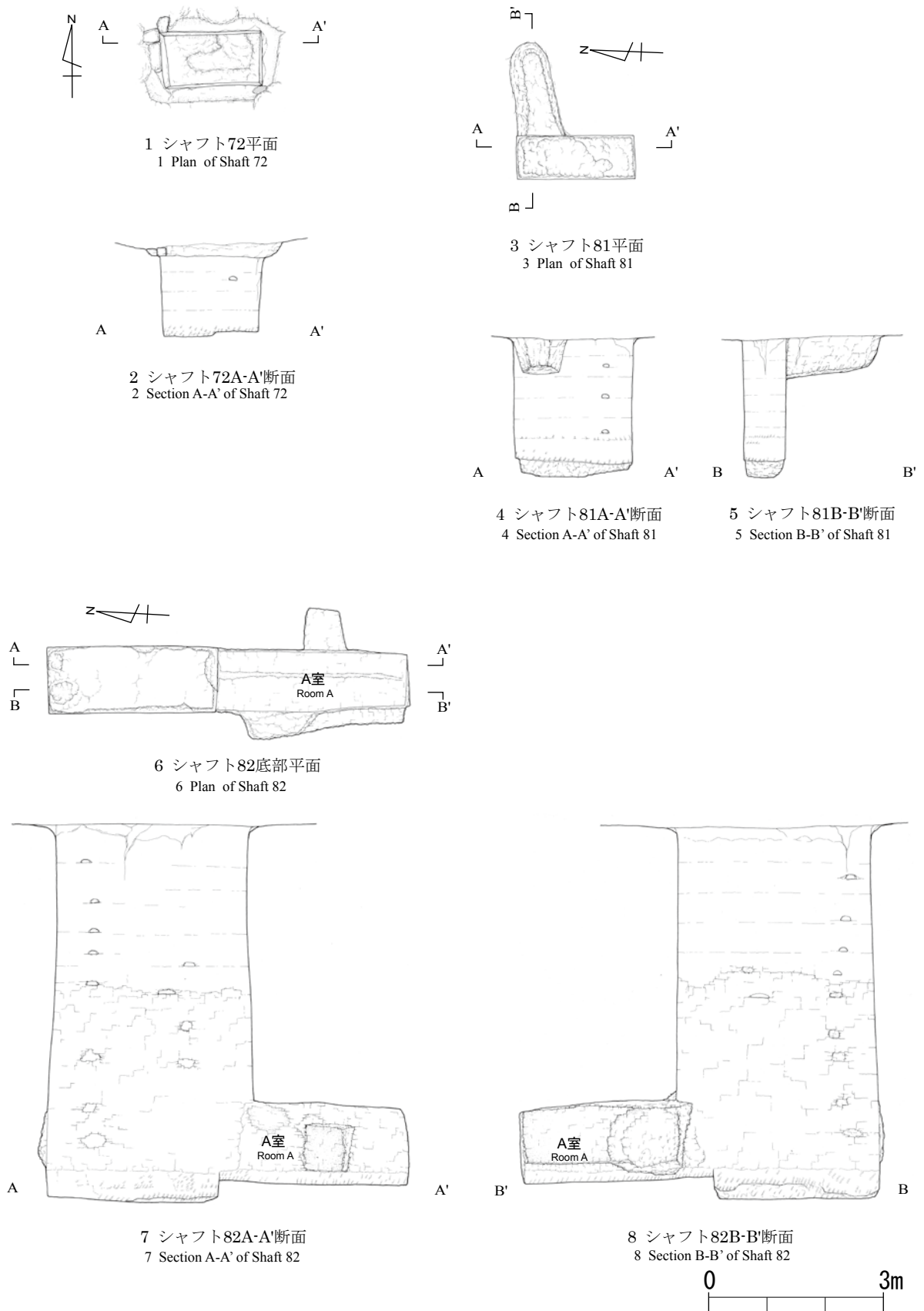


図10 シャフト72、81、82平面・断面図
Fig.10 Plan and section of Shaft 72, 81, 82

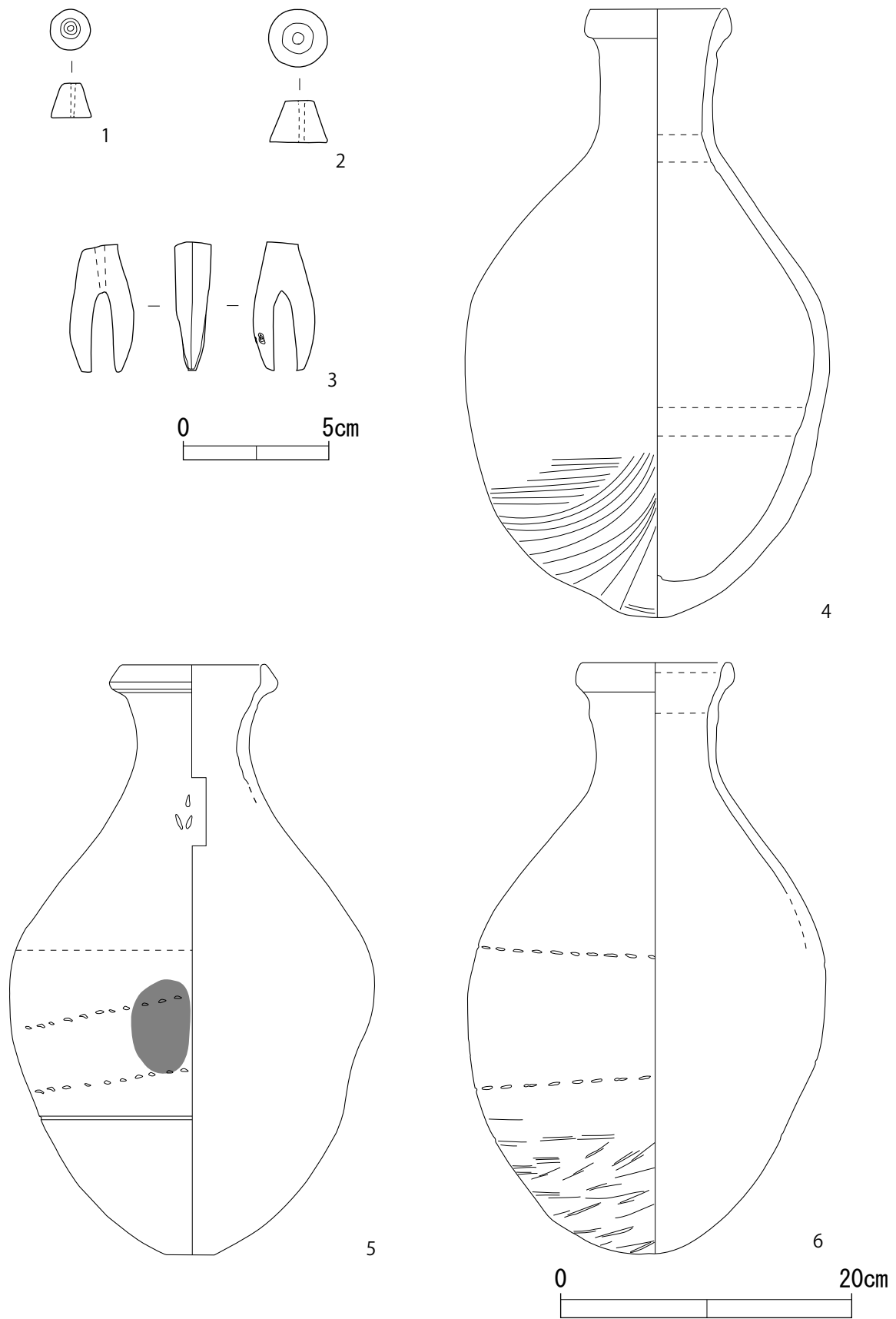


図11 シャフト82出土遺物(1)
Fig.11 Objects from Shaft 82 (1)

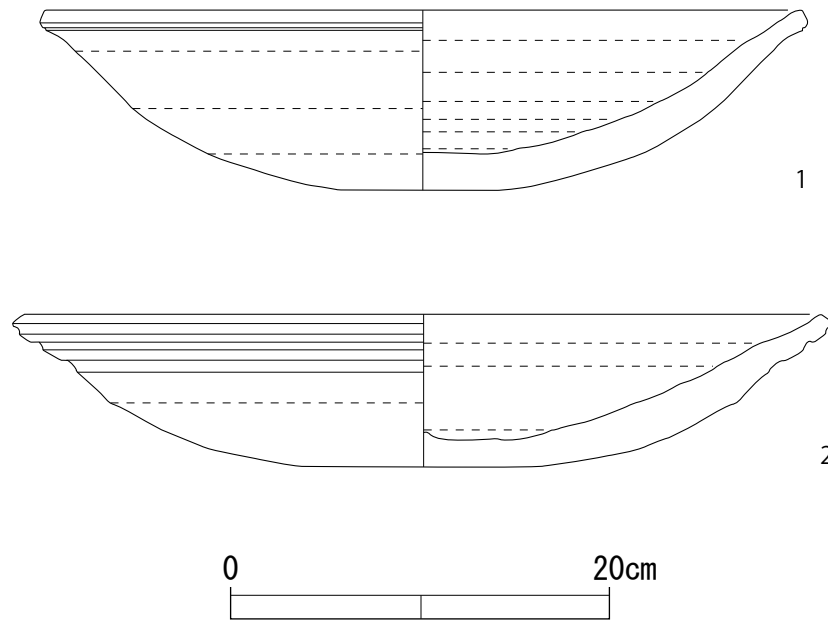


図12 シャフト82出土遺物(2)
Fig.12 Objects from Shaft 82 (2)

c) 土器 (図11-4～6, 12-1, 2)

5点の土器がA室から出土した。3点は大型の丸底壺形土器で、中王国時代のいわゆる「ビール壺 (Beer bottle)」と呼ばれるものである⁷⁾。頸部の形状から、中王国時代第12王朝末から第13王朝初期に年代づけられる⁸⁾。2点は大型の丸底皿形土器である。胎土は全て Nile C であり、中王国時代では典型的な器形である。

(6) シャフト83

シャフト83はグリッド3E31に位置しており、2007年の第13次調査の平面発掘で上部が確認されていた。開口部は円形であり、深さは約0.7mであった。底部に土器片が出土したのみで、埋葬の痕跡は発見されなかった。

(7) シャフト89 (図13)

シャフト89はグリッド3E12に位置しており、2007年の第13次調査の平面発掘で上部が確認されていた。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、開口部の大きさは2.6 x 1.3m、シャフト部の深さが5.7mであった。最下部から北側に部屋が発見された (A室)。A室は南北に長い長方形であり、長さ2.5m、幅1.1m、床面から天井までの高さが1.0mであった。A室からはわずかな人骨、木片、土器片が出土した。シャフト部からは新王国時代の土器片が出土していた。開口部の長軸が南北方向のシャフトは中王国時代のものであることが指摘されており、形状も他の中王国時代の墓と類似している。北側に部屋が造られる例は少ないが、本遺跡ではシャフト55や66などの例が確認されている (吉村、近藤他 2011: 20, 図.7-3, 4)。したがって、このシャフト墓は中王国時代の埋葬として用いられたものが盗掘を受け、シャフト部が開放された状態で放置され、後世の土器が流れ込む結果となった可能性が考えられる。

(8) シャフト110 (図14)

シャフト110はグリッド2E48に位置しており、第16次調査で発見された。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、開口部の大きさは1.7 x 0.9m、シャフト部の深さは4.8mであった。シャフトの最上部には厚さ

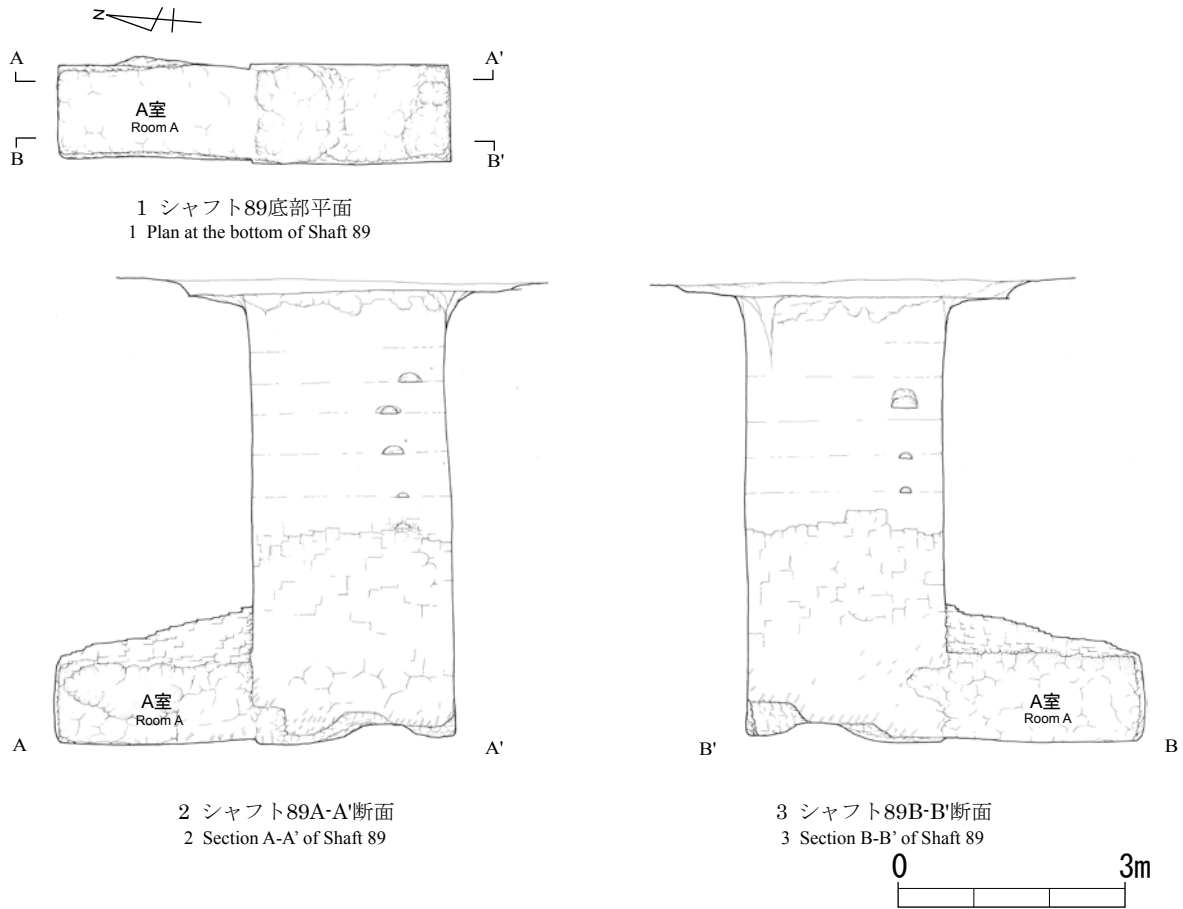
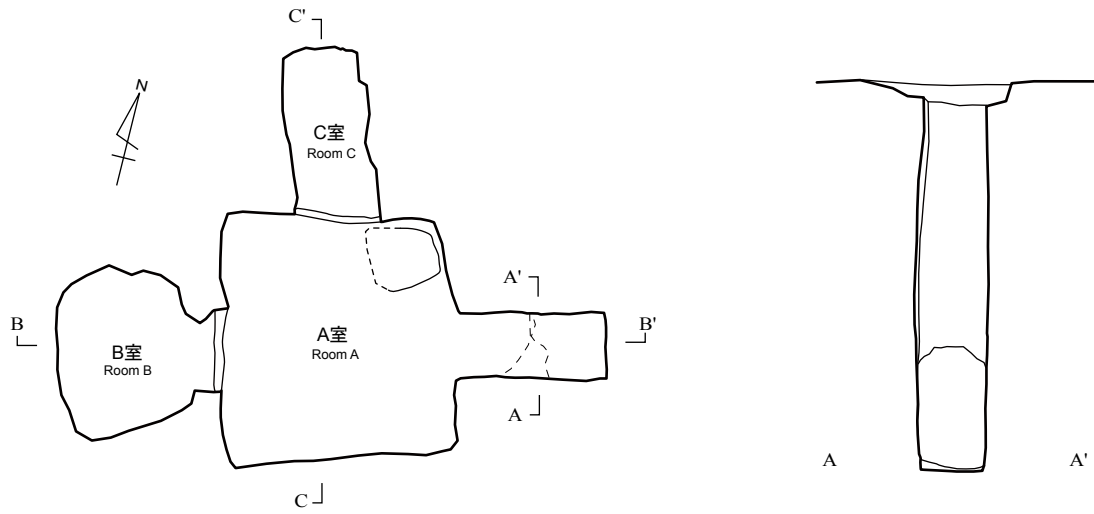


図13 シャフト89平面・断面図
 Fig.13 Plan and Section of Shaft 89

50cmに満たないタフラの堆積が確認されており、その下は黄色の細砂になっていた。シャフトの最下部から西側に部屋が発見された(A室)。A室の平面は方形であり、南北3.0m、東西3.1m、床から天井までの高さが1.6mであった。A室の西側と北側にさらに部屋が掘りこまれていた(それぞれB室、C室)。西側のB室は平面が若干南北に長い長方形であり、南北2.3m、東西1.7m、床面から天井までの高さが1.0mであった。B室の床面はA室の床面よりも0.2m程高い。北側のC室は平面が南北に長い長方形であり、南北2.4、東西1.1m、床面から天井までの高さが1.0mであり、C室の床面はA室の床面より0.3m程高い位置にある。A室には水の流入によって硬化したと思われるタフラ混じりの砂層がA室の西半分に厚く堆積しており、タフラ混じりの砂層の北側はレベルが高く層上面がC室の床面レベルまであり、南に向かうにつれ徐々に層上面のレベルが下がっていた。石灰岩ブロックの破片と日乾レンガがこの層の上に散乱していた。

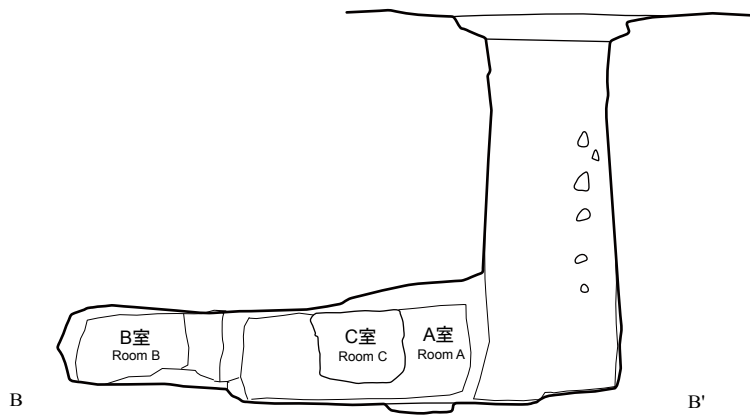
A室から、2体の人型木棺に加え、2体分の人型木棺の蓋が発見された(図15)。人型木棺の内1体(図15-A)は比較的大型の木棺であり、左側面から頭部にかけては失われてはいたものの、その他の部分の残存状態は良好であった。全体が黒色に塗られ、黄色で碑文・図像が描かれており、被葬者の名前は「タウブパウマアト(T3-wb-p3w-m3ʿt)」という名前であることが判った。この人型木棺はA室からC室にまたがって出土しており、脚側3分の1がC室に入っていた。A室では硬化したタフラ混じりの砂層の直上に置かれていた。図15-Aの木棺内部からは、木製のシャブティ・ボックスの断片が発見された。シャブティ・ボックスは全体が黒色に塗られ、黄色のラインで図像が描かれていた。

もう1体の人型木棺(図15-B)は左側面を下にする形で横倒しになってA室の北西側で出土していた。同



1 シャフト110底部平面
1 Plan at the bottom of Shaft 110

2 シャフト110A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 110



3 シャフト110B-B'断面
3 Section B-B' of Shaft 110



4 シャフト110C-C'断面
4 Section C-C' of Shaft 110



図14 シャフト110平面・断面図
Fig.14 Plan and section of Shaft 110

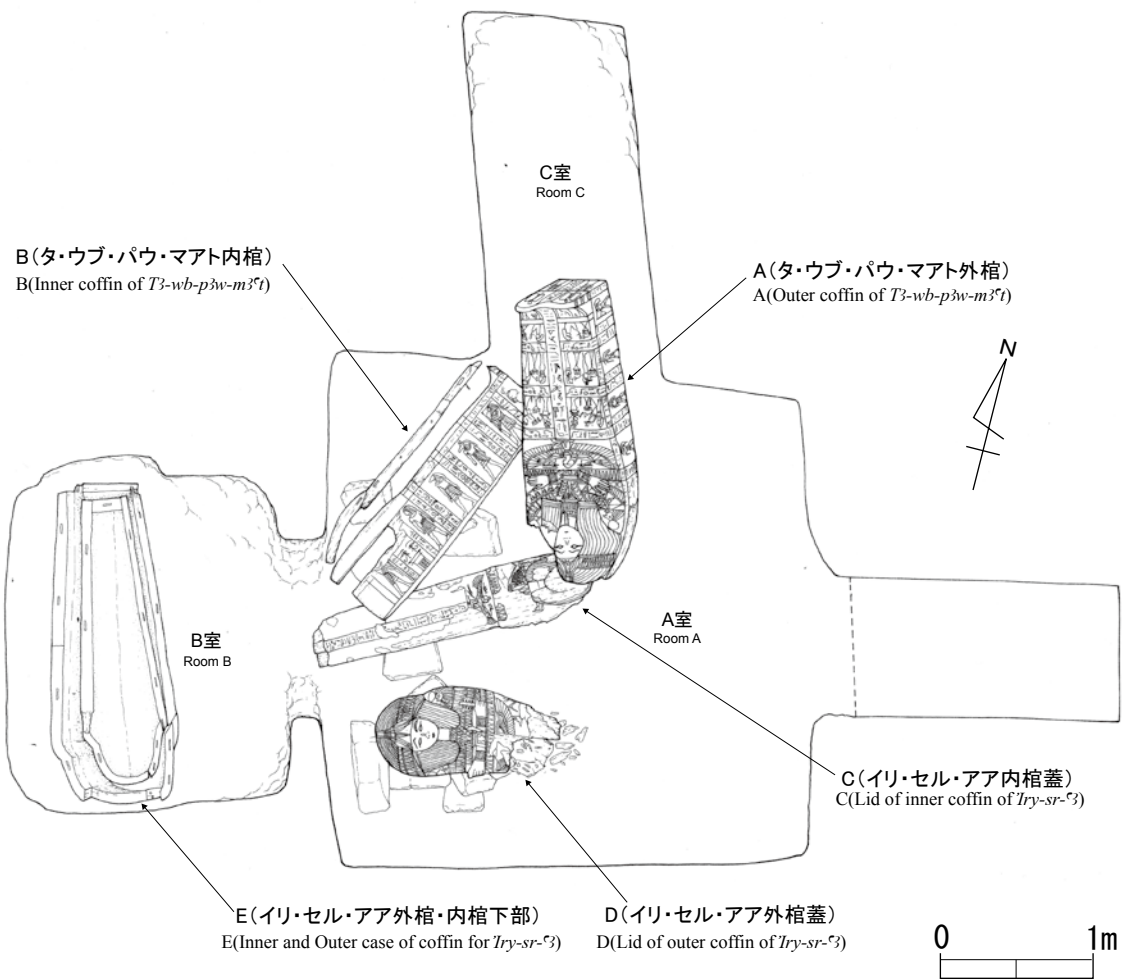


図15 シャフト110 木棺出土状況
 Fig.15 The coffins as found in Shaft 110

様に黒色の木棺で碑文・図像が黄色で描かれていたが、前述のものとは比べてやや小型であった。碑文から、この木棺は同じく「タウブパウマアト」に属するものであることが分かった。この棺の下からは前述の大型の木棺の左側面の部材が発見された。棺の所有者名が同じであること、棺の大きさに差がみられること、出土状況などから、これらの棺は入れ子式に納められた二重棺であったと考えられる。

A室の中央付近から人型木棺の蓋(図15-C)が頭を東に向けた形で、硬質化したタフラ混じりの砂層上から発見された。全体が黒色に塗られた木棺であり、蓋の下半部には1行の銘文帯があり、「イリセルアア(*Iry-sr-53*)」という人物に属するものであったことが判明した。また、その南側には下半部が失われた棺の蓋が頭を西に向ける形で、同じタフラ混じりの砂層上から発見された(図15-D)。この蓋も全面が黒色に塗られ、黄色で装飾が施されていたが、被葬者を特定できる碑文などは確認できなかった。

一方で、西奥にあるB室からは木棺の身の部分が入れ子になって2体発見された(図15-E)。木棺とB室西壁の間には、4つのシャブティ・ボックスが上下逆さまの状態で見つかった。シャブティ・ボックスには所有者の名前が書かれており、「イリセルアア」のものであることが判った。A室の中央で発見された蓋には「イリセルアア」の名が書かれていたことから、この蓋に対応する身の部分は、B室で発見された木棺であることが推測された。蓋の幅から、図15-Cが内棺の蓋であり、図15-Dが外棺の蓋と考えられる。

A室の図15-A(タウブパウマアト)の木棺の東側の砂層から、木製シャブティがまとまって出土した。残

存状況が悪いものもあり、本来副葬されていた個体数は明確でないが、少なくとも36個体を確認することができた。A室から発見された木製シャブティで碑文が確認できるものは、全てタウブパウマアトの名前が書かれていた。

A室の図15-Dの南側、A室南壁際から木製のカノポス壺が発見された。蓋がジャッカルのもの（ドゥアムウトエフ）、ハヤブサのもの（ケベフセヌウエフ）、人型のもの（イムセティ）の3つが確認された。

大型のアンフォラがB室の北西部分、西壁際で発見された。アンフォラは第20王朝に年代づけられる。また、A室から熟年男性と老年女性の2体分の人骨が出土した⁹⁾。

出土遺物

a) 木棺（写真5～9）

タウブパウマアト（外棺）：写真5、図15-A

長さ1.94m、幅0.68m、高さ0.76m、全体が黒色の樹脂で塗られ、黄色で銘文と細部の表現が描かれていた。蓋の頭部左側および身側面の頭頂部分は失われていた。蓋部中央の銘文帯には被葬者の名前「タウブパウマアト」が認められた。

鬘の中央にはロータスの花が描かれ、横方向にヘア・バンドが見られた。眼と眉は象嵌ではなく、周囲の彩色と同様に黄色で表現されていた。胸の前には手が交差された形で表現されており、両手は開かれていた。手



写真5 タウブパウマアトの人型木棺（外棺）

Photo 5 Outer anthropoid coffin of T3-wb-p3w-m3't

首まで描かれており、肘および腕のラインは彫刻によって表現されている。胸には襟飾りがあり、両端にホルス神の頭部を模した留め具が表現されていた。また、太陽の船を描いたベクトラルも表現されている。胸部下には翼を広げ、片膝をついたヌウト女神が配され、両翼の上にはウジャトの眼が描かれている。ヌウト女神の下には中央に縦方向の銘文帯が足の先端まで続き、それと直交する方向の銘文帯が両側面に向かって3本ずつ伸びている。銘文帯によって仕切られた空間の一番上（頭側）にはオシリスに向かって供物を捧げる女性が描かれ、その下の2つの空間にはミイラの姿をした神が3体配されており、それぞれに供物が捧げられている。これらの空間の表現は中央の銘文帯をはさんで左右対称になっている。足の甲に当たる部分には供物の前に跪き、片腕を頭の上に乘せた泣き女の図像が描かれていた。つま先部分には、縁取りの装飾が施されている。

身の右側面右肩付近には祠堂の上に一对のウジャトの眼があり、肩から足までの側面は縦方向の銘文帯によって4つの区画に区切られ、それぞれに頭の方に向かって立つ神の姿がイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトの順に描かれていた。反対の左側面は左肩付近に祠堂の上に伏せているジャッカルがあり、肩から足にかけては同様に縦方向の銘文帯によって4つの区画に分かれ、それぞれにイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトの姿が描かれていた。足の裏には中央に縦方向の銘文帯があり、蓋部の銘文の両側にはティト (*tit*) の結び目のサインが配され、身部分の銘文の両側にはジェド (*dd*) 柱のサインが配されていた。

タウブパウマアト（内棺）、写真6、図15-B

写真6はA室の北西部分で発見された。蓋部中央の銘文帯から「タウブパウマアト」のものであることが判明した。長さ1.79m、幅0.49m、高さ0.63m、全体が黒色の樹脂で塗られ、黄色で銘文と細部の表現が描かれていた。蓋の顔部分は剥ぎ取られているが、首に該当する部分に金箔が塗られていたことから、肌の表現とし



写真6 タウブパウマアトの人型木棺（内棺）
Photo 6 Inner anthropoid coffin of T3-wb-p3w-m3't

て顔の部分も金箔で塗られていたことが想定できる。頭部の右側は残存しており、金箔を用いてヘア・バンドが表現されていた。胸部には両翼を広げて片膝をついたヌウト女神が描かれており、両翼の上にはウジャトの眼がそれぞれ描かれている。ヌウト女神の下には胸の前で交差された手が表現されており、手の部分にも金箔が残存していた。交差された手の下には太陽の船を描いたペクトラルが描かれ、その両側に伏せたジャッカルが表現されていた。銘文帯の配置についてはタウブパウマアトの外棺（図15-A、写真5）と大きく変わらず、中央の銘文帯にタウブパウマアトの名前が書かれていた。銘文帯で区切られた空間は、最上部（頭側）にオシリリスに供物を捧げる女性があり、その下の2つの空間にはミイラの姿をしたホルスの息子が4体描かれていた。外棺同様に足の甲には泣き女の図像、裏の部分はジェド柱とティトの結び目が描かれている。身の頭頂部から頭の左側までは欠損している。身の右側面は頭付近に足方向に向かって立つ神の姿があり、肩付近に祠堂とウジャトの眼があり、肩から足にかけては縦方向の銘文帯によって区切られていた。銘文帯で区切られた空間の中には外棺と同様にイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトなどの神の姿があるが、下端（足側）にも跪いて片腕を頭に置いた泣き女が描かれていた。左側面は肩付近に祠堂の上に伏せるジャッカルがあり、肩から足にかけて縦方向の銘文帯によって区切られていた。右側面と同じく、銘文帯で区切られた空間の中にはイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトの姿が描かれていた。さらに下端（足側）にも跪いて片腕を頭に置いた泣き女が描かれていた。

イリセルアア（外棺）：写真7、8、図15-D

写真7の人型木棺の蓋はA室の南側で発見され、残存部分の長さが1.17m、幅0.64m、厚さ0.15m、顔の部分を除いて全体が黒色の樹脂で塗られ、黄色で細部の表現が描かれていた。顔は青緑色の顔料が塗られており、眉と眼、アイラインは青色のガラスおよび石を用いて象嵌で表現されていた。鬘は後ろ髪を肩に垂らす髪型を模したもので、ラメセス朝時代の男性の棺に多く用いられる。腕は胸の前でクロスされ、左右の手はダボ釘を用いて別に取り付けられている。右手には木製の「ジェド」のシンボル、左手には「アंक」のシンボルが握られていた。胸にはハヤブサの留め具が用いられた襟飾りと、太陽の船の図像が描かれたペクトラルが表現されている。胸部は残存状態が悪いものの、ヌウト女神の両翼の一部と、翼の下に伏せたジャッカルが配されていることが確認できる。

写真8はB室で入れ子になって発見された身の外棺にあたるものである。長さが2.14m、幅が0.72m、高さが0.78m、全体が黒色の樹脂で塗られていた。棺の左側面（写真8の手前側）の上部には蓋の一部が残存しており、頭部には鬘の装飾が



写真7 イリセルアアの人型木棺蓋（外棺）
Photo 7 Lid of outer anthropoid coffin for Iry-sr-53



写真8 イリセルアアの人型木棺（外棺）

Photo 8 Case of outer anthropoid coffin for Iry-sr-ʿ

黄色のラインで表現されている。タウブバウマアトの棺は側面や足裏にも黄色のラインによって彩色が施されているが、イリセルアアの外棺の身に関しては一切装飾が見られない。

イリセルアア（内棺）：写真9、図15-C

蓋はA室の中央付近で発見され、身の部分はB室で入れ子になって発見された二重棺の内側にあたる。長さが1.88m、幅0.55m、高さが0.55mである。蓋の顔部分は剥ぎ取られ失われているが、首に該当する部分は金箔が施されていたことから、肌の表現として顔の部分も金箔が施されていたことが想定できる。胸の前で交差された手も剥ぎ取られているが、同様に手にも金箔が塗られていたと推測される。鬘は外棺同様に後ろ髪を肩に垂らす髪型が表現されている。襟飾りと、ペクトラルの一部が確認できる。腕の下には、両翼を広げ片膝をついたヌウト女神の姿が描かれており、翼の下にはウジャトの眼が配置されている。

銘文帯はヌウト女神の下から、足先にかけて1本のみ表現されている。外棺同様、身に関しては装飾は見られない。

銘文帯や神々の図像の施し方、ロータスを用いた髪飾りや二段構造の髪型が表現された鬘の形態、両手を開き交差する姿で表現されている点は、第19王朝から第20王朝の木棺に見られる特徴である (Taylor 1989: 35; Taylor 2001: 169-170)。イリセルアアの外棺の蓋に表現されているように、木製のアミュレットの模型が手の部分に嵌め込まれている例は第19王朝から第22王朝初期に認められる (Raven 1991: 20, note.47)。既往の木棺に関する研究では、黒色の木棺は第18王朝後半から使用され始め第19王朝初期（ラメセス2世治世）まで使用されたと考えられている (Taylor 1989: 35; Ikram and Dodson 1998: 215; Taylor 2001: 168-169)。しかしながら、土器やシャブティ・ボックスなど共伴する遺物は第20王朝に年代づけられることから、この木棺を用



写真9 イリセルアアの人型木棺（内棺）

Photo 9 Inner anthropoid coffin of *Iry-sr-ʿ3*

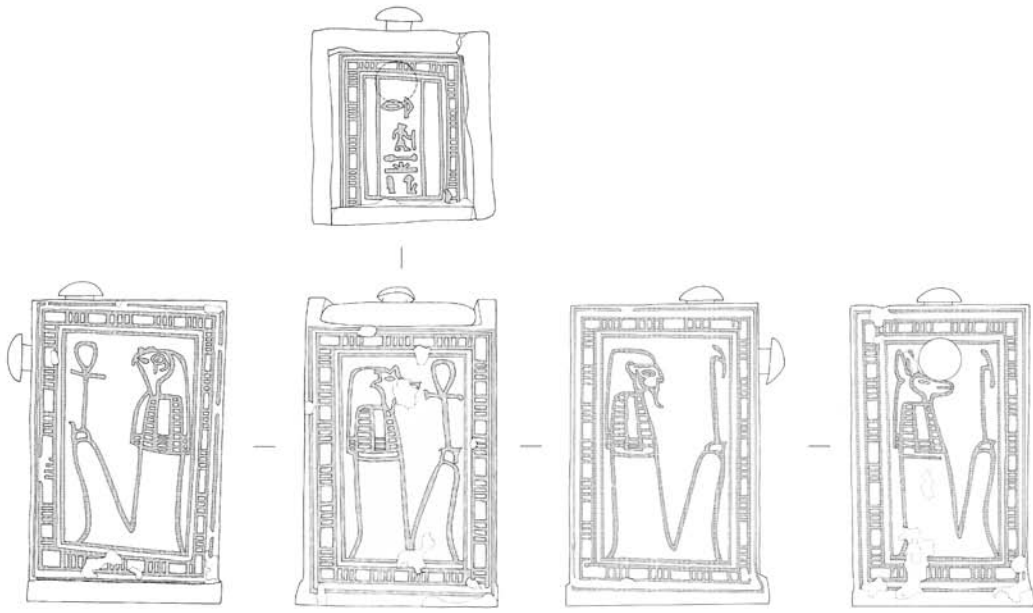
いた埋葬は第20王朝に行われた蓋然性が高い。黒色の木棺が第20王朝まで継続して使用されていたことになり、メンフィス地域では木棺の装飾は独自の発展を遂げていた可能性が指摘できる¹⁰⁾。

b) 木製シャブティ・ボックス（図16、17）

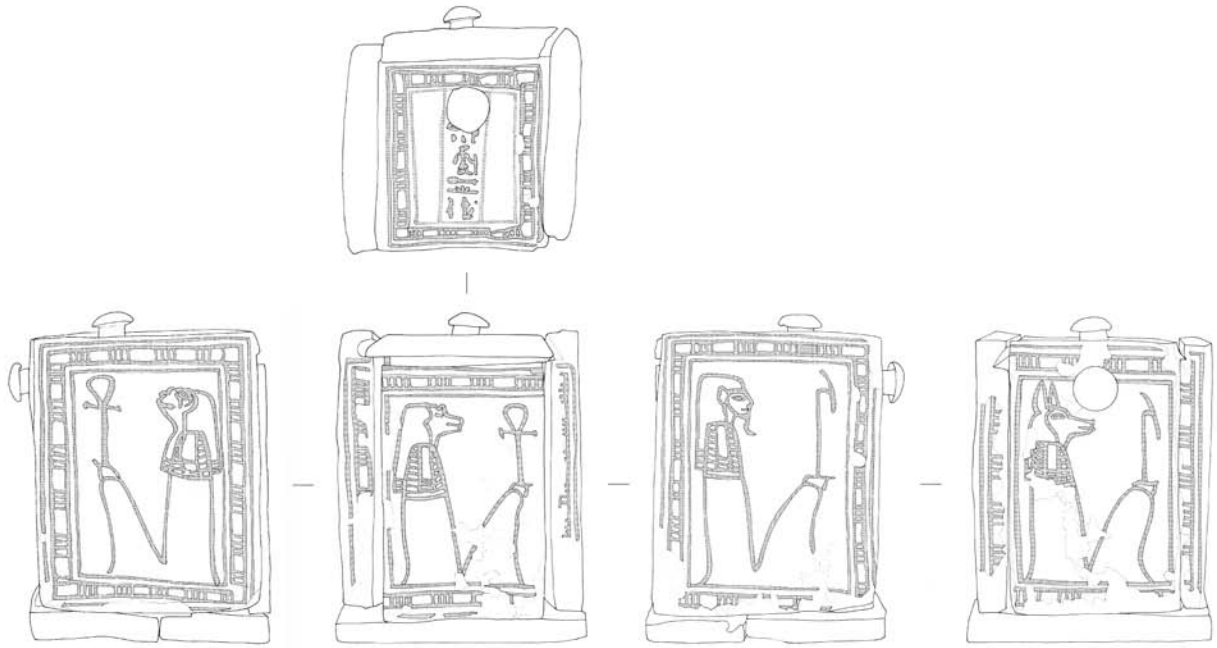
図16-1, 2、図17-1, 2はB室の西壁際で上下逆さまの状態で見られた。木製で、棺と同様に外面全面が黒色の樹脂で塗られ、黄色のラインで碑文と装飾が描かれていた。側面にはホルスの4人の息子が描かれ、スライド式の蓋の上面には被葬者の「イリセルアア」の名前が書かれていた。蓋の断面は台形を呈する。高さは28～29cm、幅18～23cm、奥行20～23cm、であり、それぞれ12～14体の木製シャブティが納められていた。D. アストンによれば、ホルスの4人の息子がシャブティ・ボックスの側面に描かれるのは、第19王朝の後期から紀元前980年頃に見られる特徴である（Aston 1994: 38）。

図17-3はA室、タウブパウマアトの外棺（図15-A、写真5）の中から発見された木製シャブティ・ボックスの断片で、外面全面が黒色の樹脂で覆われ、黄色のラインで装飾が描かれていた。残存している面の幅が17.3cm、高さ22cmであり、B室出土のものよりも比較的小さい。オシリスに対して被葬者が供物を捧げている様子が描かれており、黒色の背景に黄色の線でこのような図像が描かれるのは第19王朝の後期から第20王朝に年代づけられ、特に第20王朝に多いとされている（Aston 1994: 39, Pl.7.2）。

図17-4はA室で発見された木製シャブティ・ボックスの蓋の断片である。一部表面に塗られていた黒色の樹脂が残存しており、表面に黄色のラインで装飾が施されていたことが確認できる。断面は台形を呈していたことが推測され、B室出土のものと同形と考えられる。



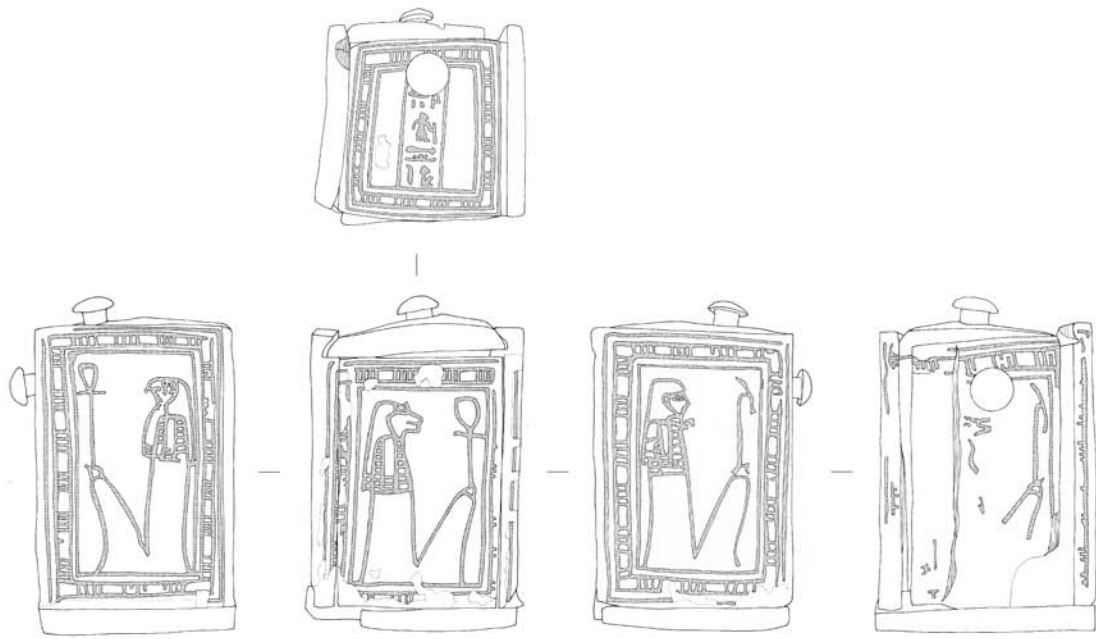
1 シャフト110B室出土木製シャブティボックス①
1 Wooden shabti box (no.1) from Room B, Shaft 110



2 シャフト110B室出土木製シャブティボックス②
2 Wooden shabti box (no.2) from Room B, Shaft 110



図16 シャフト110出土木製シャブティ・ボックス(1)
Fig.16 Wooden Shabti boxes from Shaft 110 (1)



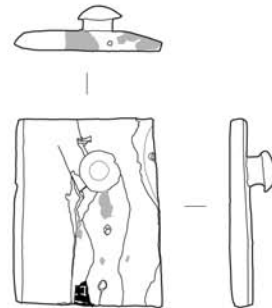
1 シャフト110B室出土木製シャブティボックス③

1 Wooden shabti box (no.3) from Room B, Shaft 110



2 シャフト110B室出土木製シャブティボックス④

2 Wooden shabti box (no.4) from Room B, Shaft 110



4 シャフト110A室出土木製シャブティボックス蓋

4 Lid of wooden shabti box from Room A, Shaft 110



3 シャフト110A室出土木製シャブティボックス

3 Wooden shabti box from Room A, Shaft 110



図17 シャフト110出土木製シャブティ・ボックス(2)

Fig.17 Wooden Shabti boxes from Shaft 110 (2)

c) 木製シャブティ (写真10～14)

写真10～13はB室で出土した木製シャブティ・ボックスに納められていたシャブティ群である。写真10(12体)は図16-1のシャブティ・ボックス、写真11(14体)は図16-2、写真12(13体)は図17-1、写真13(13体)は図17-2にそれぞれ納められていた。全てのシャブティが全体を黒色で塗られ、その上に黄色で碑文と細部の装飾が描かれていた。全てイリセルアアの名前が書かれている。どのグループにもキルトをまとった姿を現したシャブティが1体含まれているが、写真14のグループのみ2体含まれていた。一定数のシャブティのグループに対して監督者であるシャブティが加えられる例はこれまでも知られている(Schneider 1977: I, 267)。

写真14はA室のタウブパウマートの外棺(図15-A)の東側の砂層から出土した木製シャブティ群である。B室出土のものと同様に、黒色の背景に黄色で碑文と細部の装飾が描かれていた。キルトをまとった姿のシャブティも2体確認されている。A室出土のシャブティはシャブティ・ボックスには入れられておらず、個別に砂層から発見されているため、グループ関係は不明である。

1人の被葬者に対するシャブティの数は、いくつかの例外を除けば第19王朝初期までは10体を超えないが、



写真10 シャフト110B室出土木製シャブティ・ボックス①のシャブティ

Photo 10 Shabtis in shabti box no.1 found from Room B, Shaft110



写真11 シャフト110B室出土木製シャブティ・ボックス②のシャブティ

Photo 11 Shabtis in shabti box no.2 found from Room B, Shaft110



写真12 シャフト110B室出土木製シャブティ・ボックス③のシャブティ

Photo 12 Shabtis in shabti box no.3 found from Room B, Shaft110



写真13 シャフト110B室出土木製シャブティ・ボックス④のシャブティ

Photo 13 Shabtis in shabti box no.4 found from Room B, Shaft110



写真14 シャフト110A室出土木製シャブティ
Photo 14 Shabtis found from Room A, Shaft110

第19王朝以後、特に第20王朝では副葬されるシャブティの数が顕著に増加すると言われている (Schneider 1977: I, 267)。B室のイリセルアアに対するシャブティは全部で52体あることから、第19王朝以後の傾向と一致する。黒色の背景に黄色で描かれた木製のシャブティは近隣のサッカラでも発見されており、第19王朝に年代づけられている (Martin et al. 2001: 40, Pl.77, cat.28-c, g, r)。

d) 木製カノポス壺 (図18)

3点の木製カノポス壺が、A室の木棺蓋 (図15-D) の南側、南壁際から出土した。図18-1はジャッカルの頭部を持つドゥアムウトエフ、図18-2はハヤブサの頭部を持つケベフセヌウエフ、図18-3は人型の頭部を持つイムセティを表現したものである。木棺やシャブティ・ボックス、シャブティと同様に全面が黒色で覆われ、黄色の線で細部が描かれている。黄色による彩色が行われるのは蓋である頭部のみであり、身の部分には見られない。

e) 土器 (図19)

図19はA室およびB室から発見された主な土器である。図19-2はB室の北西部分、西壁際で床面直上から発見されたアンフォラである。頸部に入れられていた封泥が付近で発見されており、アンフォラの内部には灰色の粉状のものが充填されていた。肩部が緩やかなカーブを描き、胴部の最大径となる部分が胴下半部に位置するタイプのアンフォラは、D. アストンによる分類のB3に該当すると考えられる。B3はセトナクト王もしくはラメセス3世の治世からラメセス11世の治世に年代づけられており (Aston 2004: 193, 図.8-b)、ほぼ第20王朝に相当する。

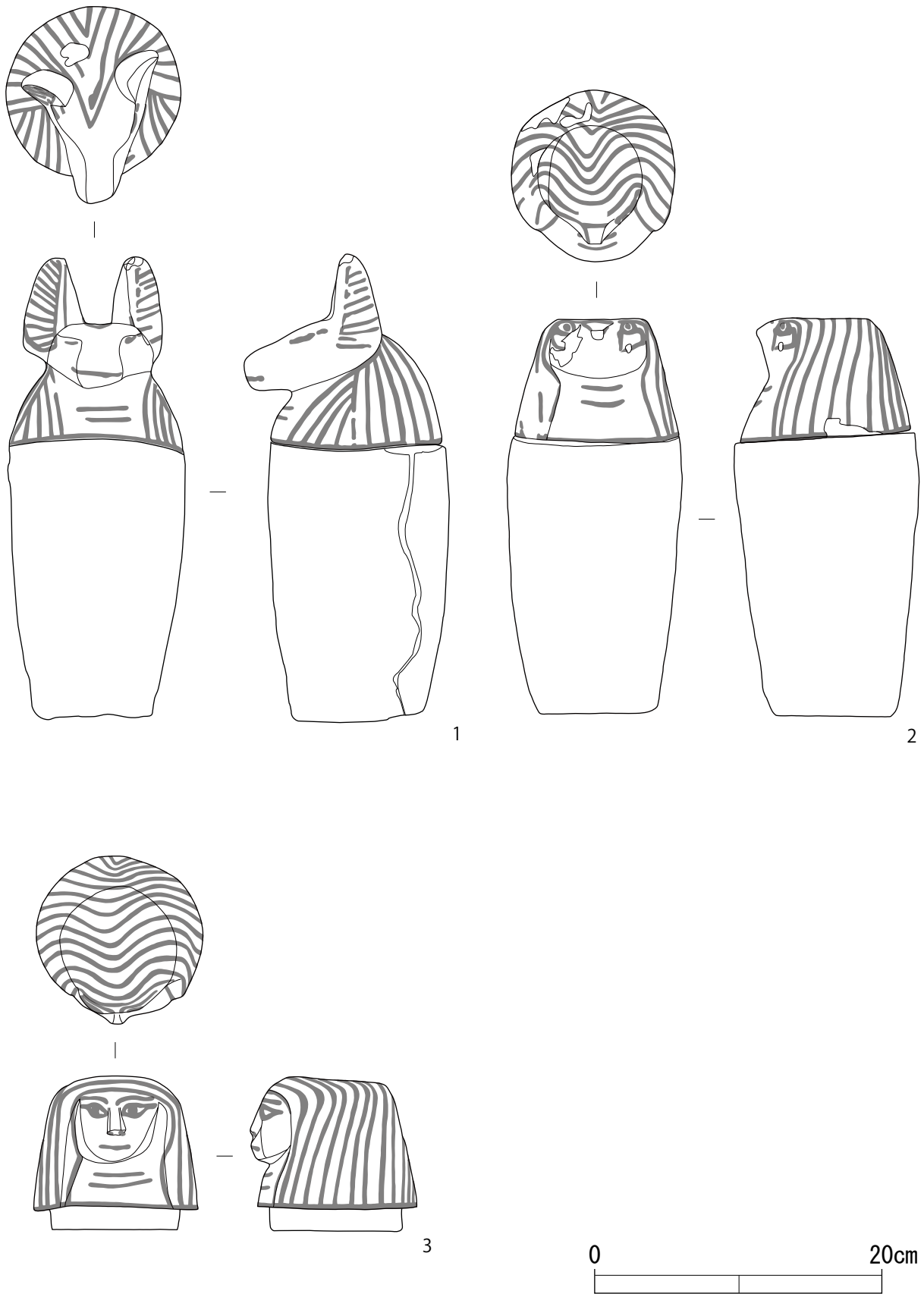


図18 シャフト110A室出土木製カノピス壺
Fig.18 Wooden canopic jars found from Room A, Shaft 110

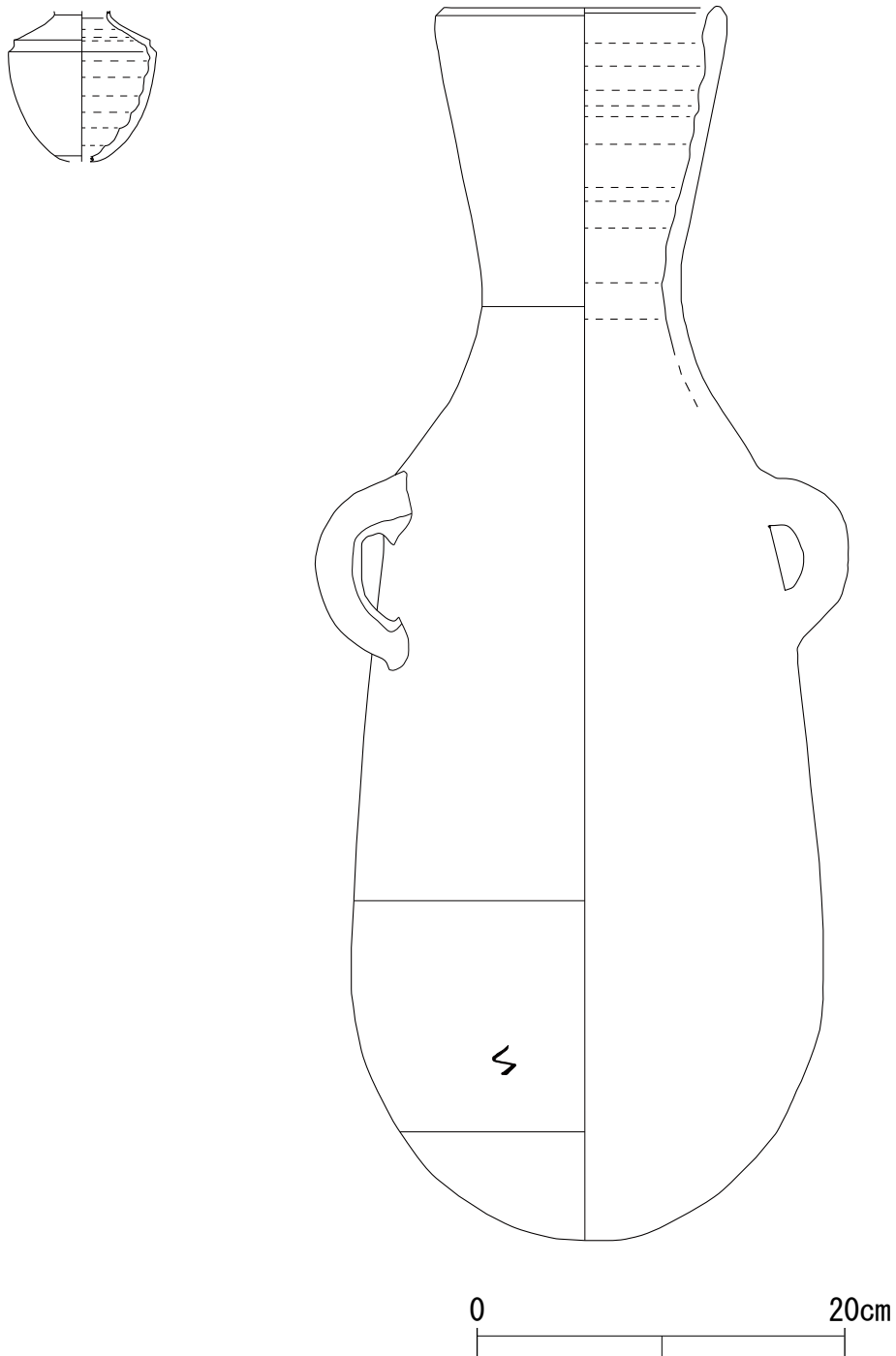


図19 シャフト110出土土器
Fig.19 Pottery from Shaft 110

シャフト110のまとめ

シャフト110はタウブパウマアトとイリセルアアの2人の人物の埋葬であり、熟年男性と老年女性の2体の人骨が出土したこともそれを裏付けている。木製シャブティ・ボックスはD.アストンの研究によると第19王朝後期から第20王朝に年代づけられ、特に第20王朝に多いことが指摘された。また、アンフォラについても同じくD.アストンの研究によって、ほぼ第20王朝に相当することが分かった。木棺も第19王朝から第20王朝に見られる特徴を有しており、これらの年代観と矛盾しない。これらのことから、シャフト110の埋葬は第20王朝頃に年代づけられると推測される。

特筆すべきは、木棺およびシャブティに書かれた碑文である。木棺の蓋とシャブティの正面に縦方向に書かれた碑文は、イリセルアアではすべて向かって右側が前であるのに対し、タウブパウマアトは向かって左側が前となる。この方向性は、すべてのシャブティに貫徹されている。つまり、木棺、シャブティがすべて一対のものとして計画されていることが見受けられる。

(9) シャフト 111 (図 20)

シャフト 111 はグリッド 2E48 に位置しており、第 16 次調査で存在が確認された。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、開口部の大きさは 2.2 x 1.1m であった。シャフト部の深さは 0.6m であり、埋葬の痕跡も見られなかったことから、未完成のシャフトと考えられる。

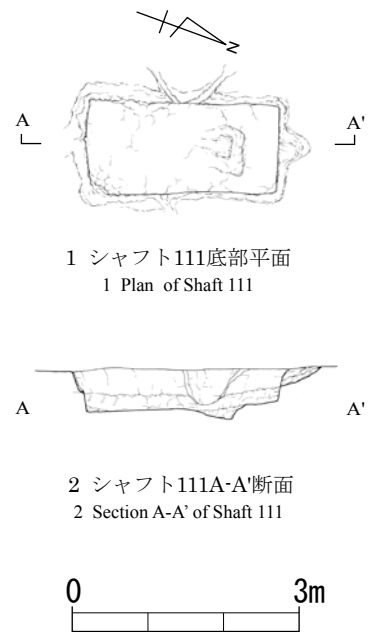


図 20 シャフト 111 平面・断面図
Fig.20 Plan and section of Shaft 111

III. 第 17 次調査

1. はじめに

第 17 次調査では「タ」墓の北側にあるシャフト墓の発掘を実施した。対象となった墓はシャフト 79、107、108、109 であり、シャフト 109 以外のシャフトは地下でつながっていた。西からシャフト 79、108、107 の順で並んでおり、両端のシャフト 79 と 107 は出土遺物から中王国時代の墓と考えられる。シャフト 108 は新王国時代の埋葬と推測されることから、シャフト 108 を掘削した際に両端のシャフトにつながってしまったものと考えられる。以下、各シャフト墓の発掘の成果について報告する。

2. シャフト墓の発掘

(1) シャフト 79 (図 21、22-1)

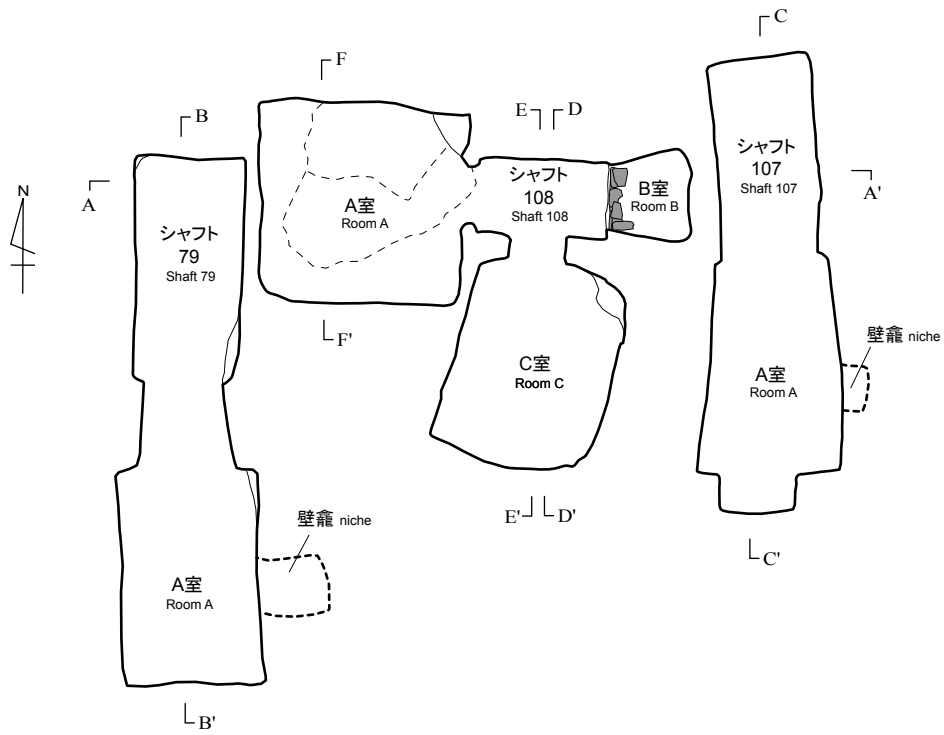
シャフト 79 はグリッド 2E49 に位置しており、2007 年の第 13 次調査でシャフトの開口部が確認されていた。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、平面の大きさが 3.0 x 1.4m、シャフト部の深さは 6.7m であった。シャフト開口部の南側には日乾煉瓦による囲いの一部が残っていた。シャフト部からはファイアンス製シャブティの胴部が出土している。

シャフトの最下部から南側に部屋が発見された (A 室)。A 室の平面は南北に長い長方形で、長さ 4.0m、幅 1.8m、床面から天井までの高さが 1.9m であった。A 室の東壁には床面から 0.7m のところで奥行 0.9m、幅 0.7m、高さ 1.2m の壁龕が穿たれていた。A 室からは、ファイアンス製カバ像の断片、ファイアンス製の小像、ファイアンス製ビーズ、土器が出土した。ファイアンス製小像は第 13 王朝に年代づけられた例があり、土器は第 13 王朝初期に年代づけられることから、シャフト 79 は第 13 王朝初期の埋葬と考えられる。

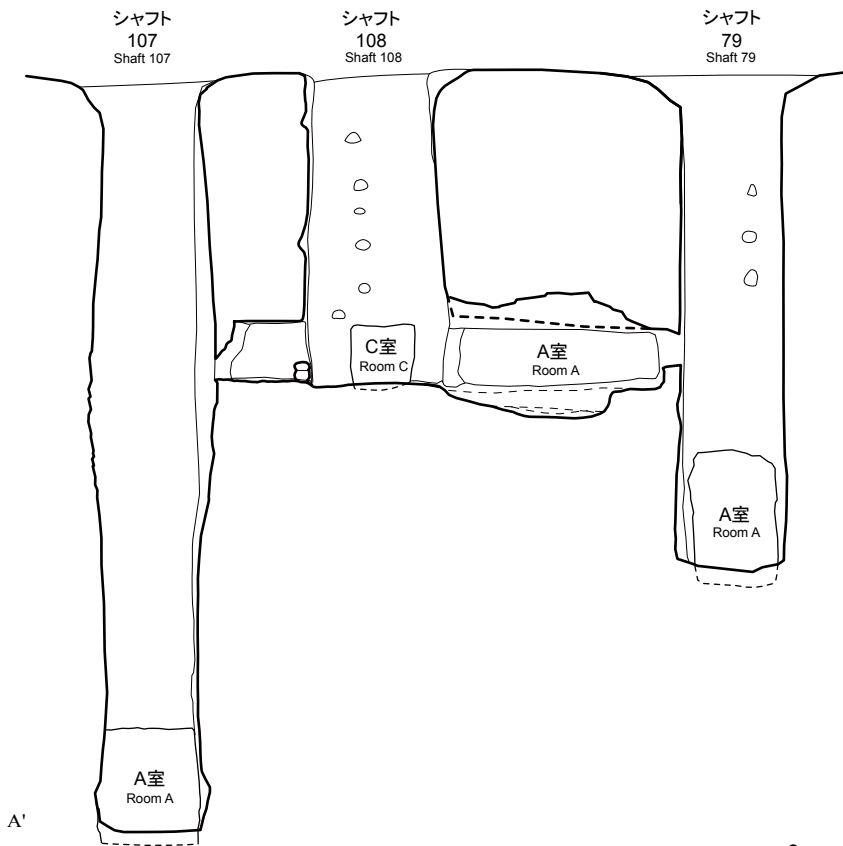
出土遺物

a) ファイアンス製シャブティ (図 23-1)

ファイアンス製シャブティの胴部がシャフト部から出土した。ファイアンスは青色で、首飾り、腕などの細部の表現や銘文帯は黒色で描かれている。類似するファイアンス製シャブティはこれまでも「タ」墓やその周辺のシャフト墓からも出土している (吉村、近藤他 2005: 117, 写真 6; 吉村、馬場他 2009: 12, 図 8.1, 写真

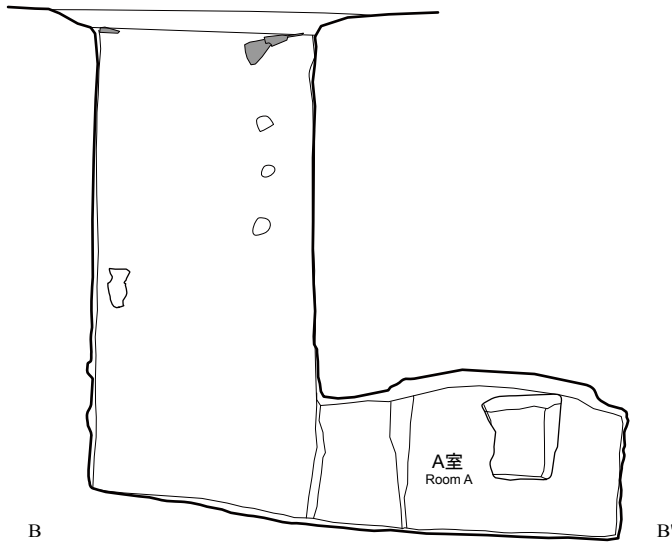


1 シャフト79、107、108平面
1 Plan of Shaft 79, 107, 108

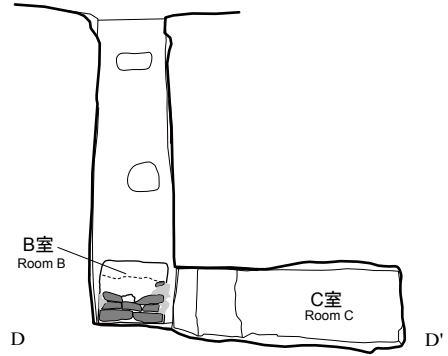


2 シャフト79、107、108A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 79, 107, 108

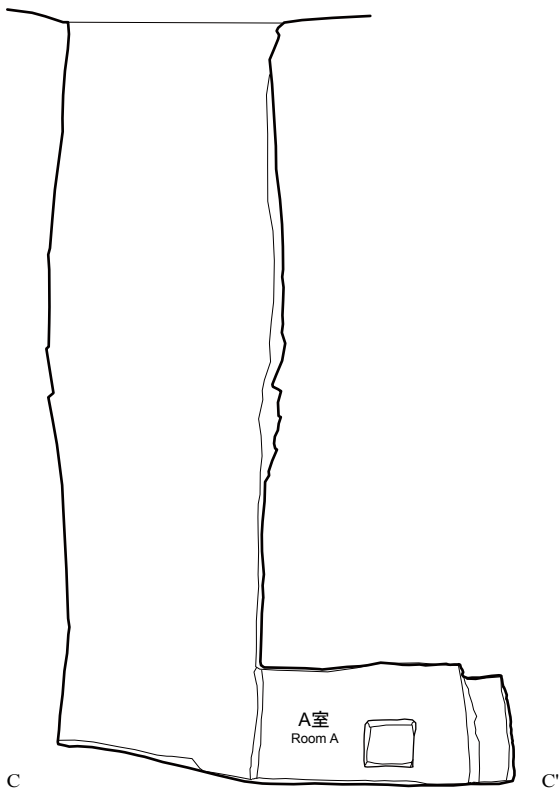
図21 シャフト79、107、108平面・断面図(1)
Fig.21 Plan and section of Shaft 79, 107, 108 (1)



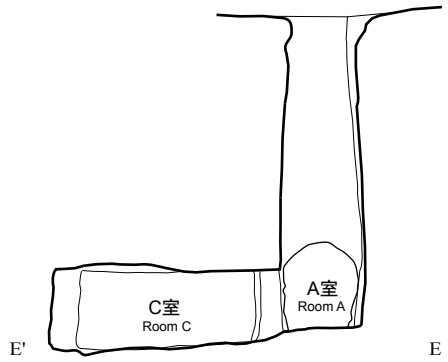
1 シャフト79B-B'断面
1 Section B-B' of Shaft 79



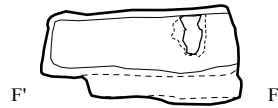
3 シャフト108D-D'断面
3 Section D-D' of Shaft 108



2 シャフト107C-C'断面
2 Section C-C' of Shaft 107



4 シャフト108E-E'断面
4 Section E-E' of Shaft 108



5 シャフト108A室F-F'断面
5 Section F-F' of Room A, Shaft 108



図22 シャフト79、107、108平面・断面図(2)
Fig.22 Plan and section of Shaft 79, 107, 108 (2)

5; 吉村、近藤他 2011: 74-78, Fig.46, 47, Pl.17)。サッカラ地区の類例ではマヤとメリトの墓 (Raven 2001: 37, Pl.19, cat.134, 135a, b, 136)、イウルウデフ墓 (Raven 1991: 41-42, Pl.41, cat.49-52) で発見されており、第19王朝に年代付けられている。

b) ファイアンス製ビーズ (図 23-2 ~ 7)

図 23-2 ~ 7 は断面が台形を呈する青色ファイアンス製のビーズであり、全て A 室から出土した。同種のファイアンス製ビーズは前述の第16次調査シャフト 82 からも出土している (図 11-1, 2)。同形のファイアンス製ビーズはハラガ、ラフーンの中王国時代の墓域やリシュトで出土している (Engelbach 1923: Pl.LI-61; Petrie et al. 1923: Pl.LXIII-61B2, 61C, 61C2; Arnold 1992: 66, 75, Pl.79-98, Pl.91-207)。

c) ファイアンス製品 (図 23-8)

断面が台形となる筒状のファイアンス製品であり、A 室から出土した。

d) ファイアンス製小像 (図 23-9 ~ 11)

図 22-9 ~ 11 は厚さ約 5 mm の台の上に動物を象った像が配された青色ファイアンス製の小像群であり、全て A 室から出土した。図 23-9 はイヌを象っているようであり、一部黒色による彩色が見られた。類例としては、リシュトのセンウセレット 1 世のピラミッドにあるボート・ピットから出土したものがある (Arnold 1992: 78-79, Pl.86.239)。この場所から出土した小像群はアビュドスの北墓地 416 号墓から出土した小像群 (Kemp and Merrillees 1980: 135-147) と同じタイプであり、416 号墓から出土した土器群から第13王朝に年代づけられている (Arnold 1992: 78, note.165)。図 23-10, 11 は細長い楕円形または長方形の台の上に何らかの像があったようであるがすでに失われており、2 か所で欠損が見られるのみである。リシュトのセンウセレット 1 世のピラミッド・コンプレックス内にあるシャフトから、細長い楕円形の板の上に、座っている人物 (もしくはサル) とイヌが向かい合う形で表現されたファイアンス製小像が発見されており、同じコンプレックス内のピットからも同種の小像の破片が出土している (Arnold 1992: 61-62, 66-67, Pl.75.52, 79.105)¹¹⁾。図 23-10, 11 のファイアンス製小像も同様の遺物であったと考えられる。

e) ファイアンス製カバ像 (図 23-12 ~ 14)

図 23-12 は A 室から出土したファイアンス製のカバ像の前足部分と考えられるもので、頭部と胴体の後ろ半分が失われていた。青色のファイアンスで、表面には黒色でロータスが描かれていた。図 23-13, 14 は形状や大きさから同じカバ像の後ろ足と考えられる断片である。ファイアンス製のカバ像は墓に入れられる前に意図的に壊される習慣があったと考えられている。ファイアンス製カバ像が使用された年代については少なくとも中王国時代から第2中間期の間であると考えられている (Lacovara 1988: 127)¹²⁾。

f) 土器 (図 24, 25)

図 24 と 25 の土器は、図 24-6 のアンフォラの底部を除いて全て A 室から出土しており、中王国時代の典型的な器形である。図 24-3, 4, 7, 8 および図 25-1, 2 は「ビール壺 (Beer bottle)」と呼ばれている大型の丸底壺形土器であり、頸部の形状から第13王朝初期に年代づけられる¹³⁾。

(2) シャフト 107 (図 21, 22-2)

シャフト 107 はグリッド 2E50 に位置しており、2008 年の第16次調査でシャフトの開口部が確認されていた。



図23 シャフト79出土遺物(1)
Fig.23 Objects from Shaft 79 (1)

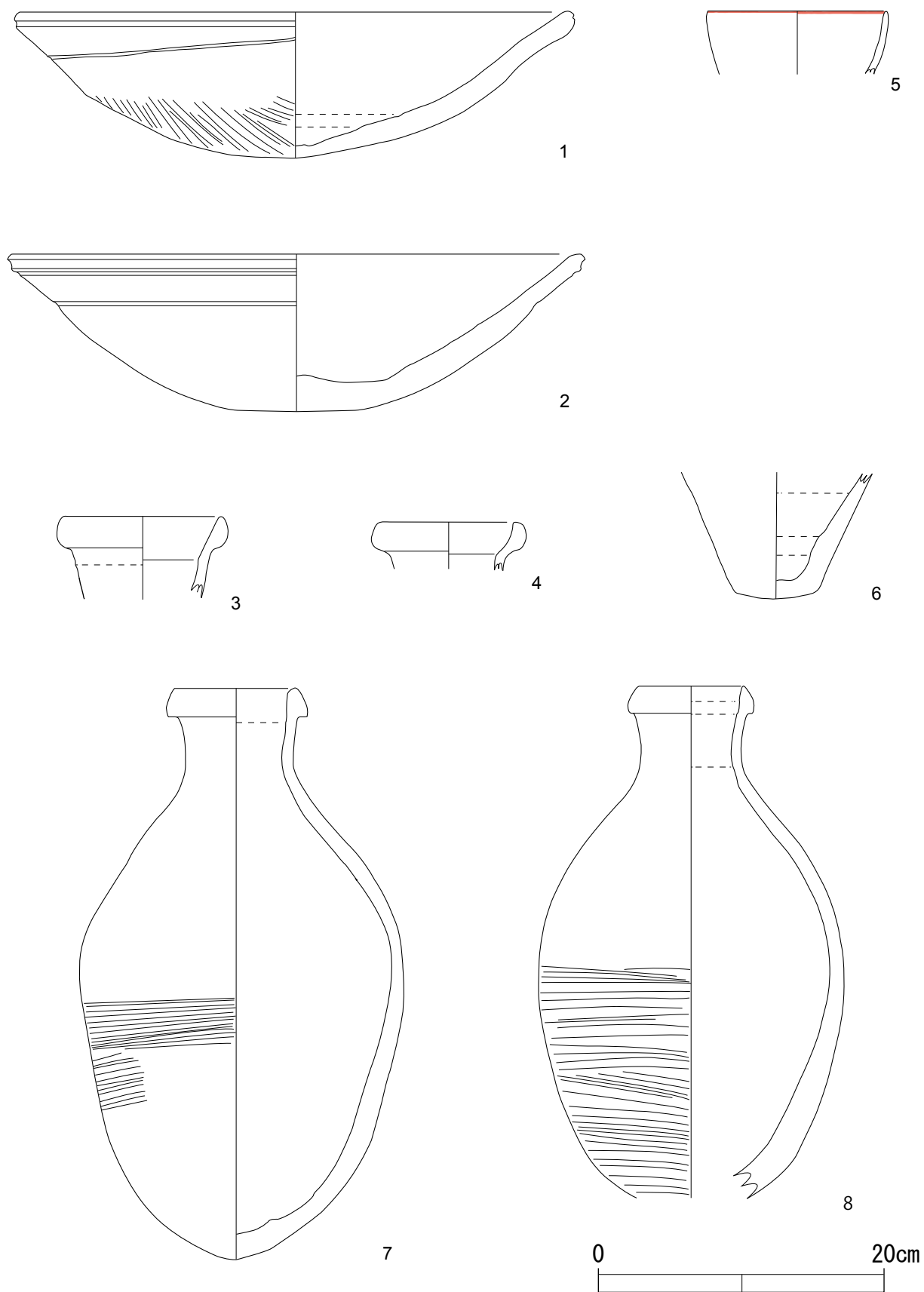


図24 シャフト79出土遺物(2)
Fig.24 Objects from Shaft 79 (2)

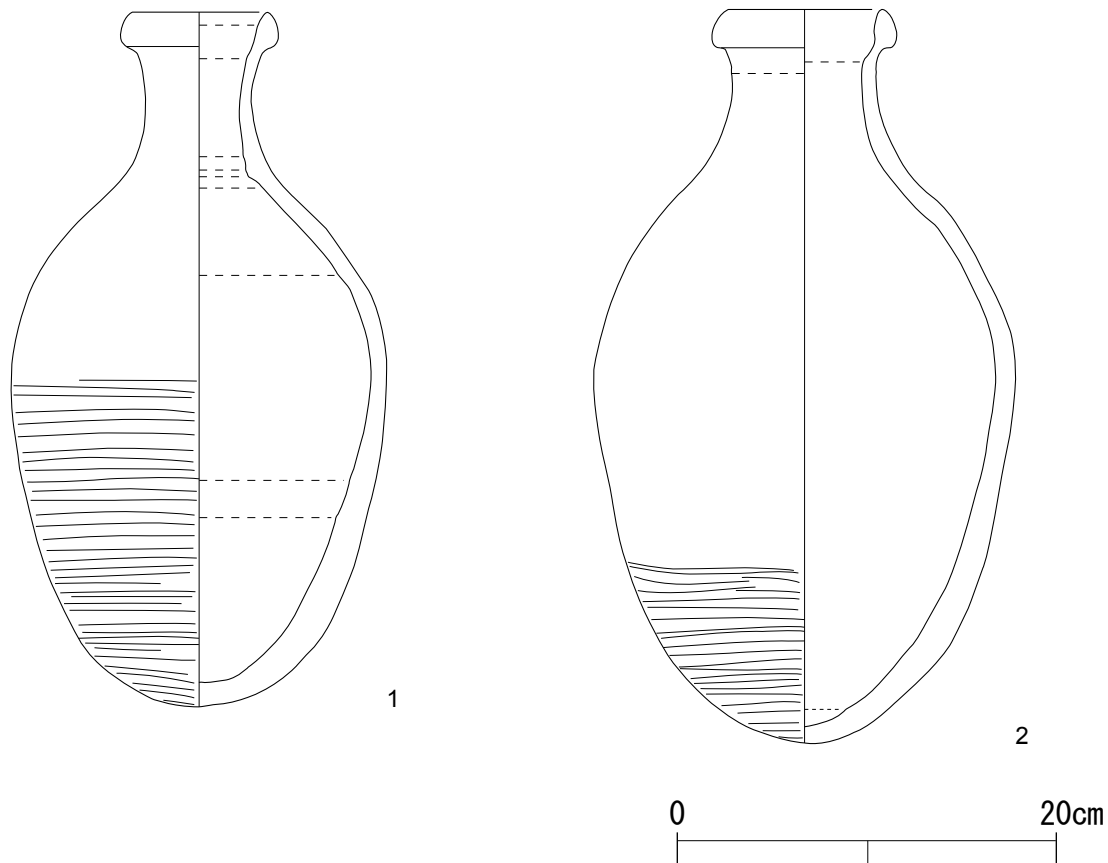


図25 シャフト79出土遺物(3)

Fig.25 Objects from Shaft 79 (3)

シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、平面の大きさが2.6m x 1.4m、シャフト部の深さは10.1mであった。シャフト部の上部は細砂のみであったが、地上から-3.2mのところから南側から日乾煉瓦が含まれたタフラの堆積が発見されており、シャフト最下部まで続いていた。堆積には土器片も多く含まれていた。シャフト部からファイアンス製のビーズが出土している。

シャフトの最下部から南側に部屋が発見された(A室)、A室の平面は南北に長い長方形で、長さ2.6m、幅1.4m、床面から天井までの高さが1.5mであった。A室の東壁には床面から約0.25mのところから奥行0.4m、幅0.6m、高さ0.6mの壁龕が穿たれていた。壁龕の前には長さ0.6m、幅0.47m、厚さ約0.25mの石灰岩ブロックが床面の直上から出土した。石灰岩ブロックの上面はちょうど壁龕の床面と同じ高さになっていた。

A室からは、完形の大型壺形土器9個体が、A室東側の壁にもたせ掛けるようにして床面の直上から出土した(写真15)。その他、人骨、ファイアンス製ビーズ、象嵌が出土している。

出土遺物

a) ファイアンス製ビーズ片(図26-1)

図26-1は青色ファイアンス製のビーズ片であり、シャフト部から出土した。断面が台形を呈しており、前述のシャフト79や第16次調査シャフト82からも出土している(図11-1, 2, 図23-2~7)。ハラガ、ラフーンの墓域やリシュトから出土しており、中王国時代に類例が認められる(Engelbach 1923: Pl.LI-61; Petrie et al. 1923: Pl.LXIII-61B2, 61C, 61C2; Arnold 1992: 66, 75, Pl.79-98, Pl.91-207)

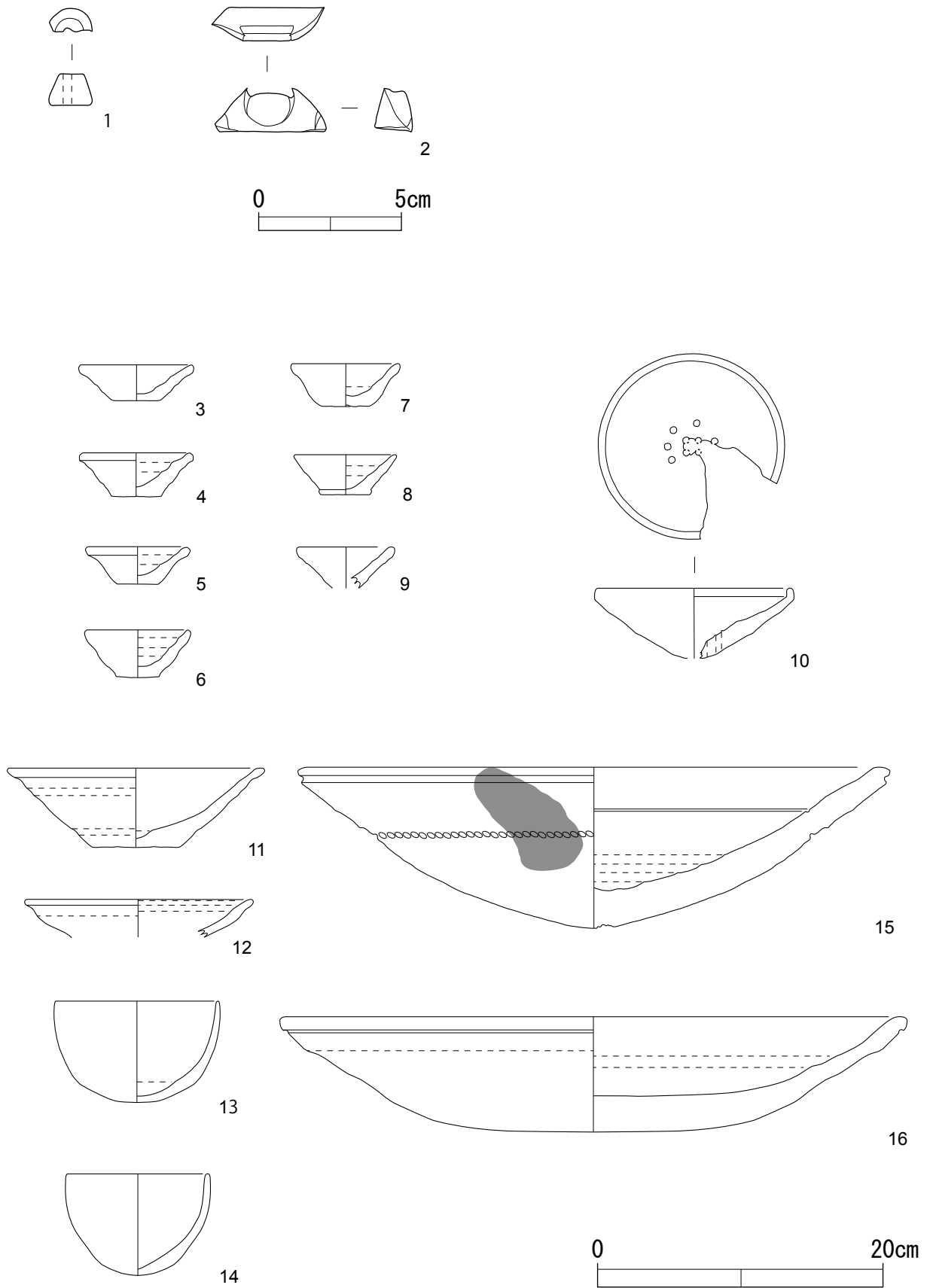


図26 シャフト107出土遺物(1)

Fig.26 Objects from Shaft 107 (1)



写真15 シャフト107A室土器出土状況

Photo 15 Pottery bottles as found in Room A, Shaft 107

b) 象嵌 (図26-2)

図26-2はA室から出土した目の象嵌と思われるものであり、黒目の部分は失われていた。人型の木棺もしくはミイラマスクに嵌め込まれていたと考えられる。

c) 土器 (図26-3～16、27)

図26にあるものは、シャフト部出土の26-9、13、14以外はすべてA室から出土したものである。図27では13のみシャフト部出土で、残りはすべてA室から出土した。特徴的なものとして、まず図26-10はA室から出土した丸底の皿型土器であり、底部に複数の穿孔が見られた。年代の基準となるものは、半球形碗形土器(図26-13、14)と大型丸底壺形土器(図27)である。半球形碗形土器は2点ともシャフト部から出土したものであり、器形は第12王朝後期から第13王朝初期にかけて見られるものである¹⁴⁾。大型丸底壺形土器(ビール壺)第13王朝初期に年代付けられる¹⁵⁾。図27-1～9はA室東側の床面からほぼ完形で発見されたものであり、図27-10、11は接合の結果復元されたものである。

(3) シャフト108 (図21、22-3～5)

シャフト108はグリッド2E50に位置しており、2008年の第16次調査でシャフトの開口部が確認されていた。開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさが1.0 x 1.7m、シャフト部の深さは4.1mであった。シャフト部からファイアンス製のシャブティ片が出土している。

シャフト部底の西側、東側、南側から部屋が発見された(それぞれA室、B室、C室)。西側のA室の平面は方形を呈しており、南北2.7m、東西2.8mで床面から天井までの高さが0.8mであった。A室の床面は中央部から北側にかけて一段低くなっており、南端・西端とは最大で約0.5mの段差がある。西壁には高さ0.5m、幅0.3mの穴が開いており、西隣りにあるシャフト79のシャフト部へ貫通していた。床面が一段低くなっている部分から葦が見つかり、土器片が少量出土しているが、人骨やそれ以外の遺物は発見されなかった。東側のB室は南北が1.2m、東西が1.1mであり、床面から天井までの高さが0.8mであった。B室の東壁は、隣にあるシャフト107のシャフト部に一部貫通していた。B室開口部には日乾煉瓦による壁体が築かれていた。シャフト108のB室を掘削している際に、隣のシャフトにぶつかってしまったため、B室の掘削を取りやめ、流れ込んでくる砂を止めるために日乾煉瓦による壁体を築いたものと推測される。日乾煉瓦にはスタンプが押されていたものが少なくとも4個確認された。スタンプは過去にイパイのトゥーム・チャペルで確認されていたものと類似していることから、これらの日乾煉瓦はイパイのトゥーム・チャペルに由来すると考えられる。

南側のC室はやや南北に長い方形であり、南北2.7m、東西2.1m、床面から天井までの高さが1.0mであった。C室の南西隅から床面直上で人型木棺の蓋の足部分と考えられる断片が出土した。

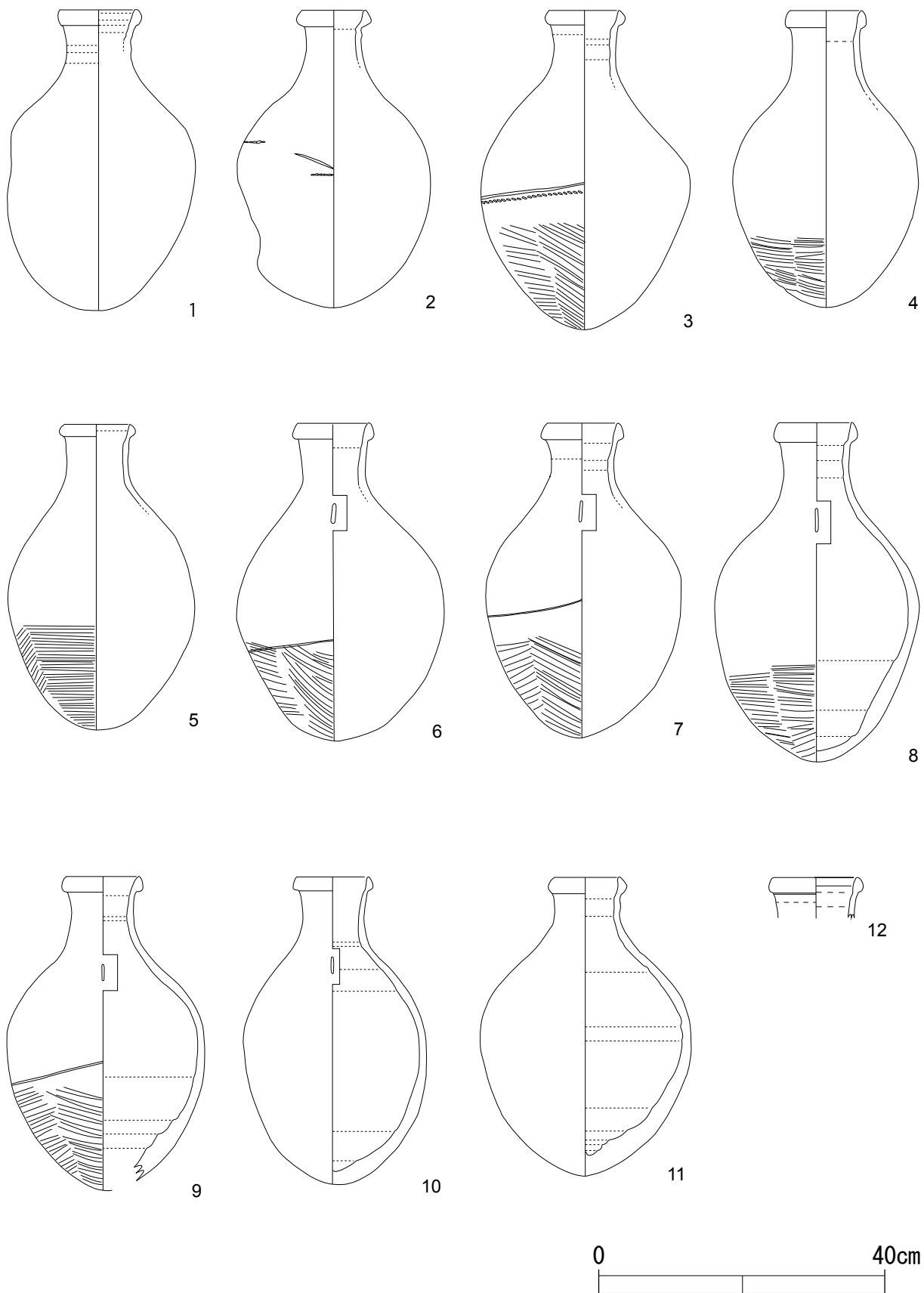


図27 シャフト107出土遺物(2)

Fig.27 Objects from Shaft 107 (2)

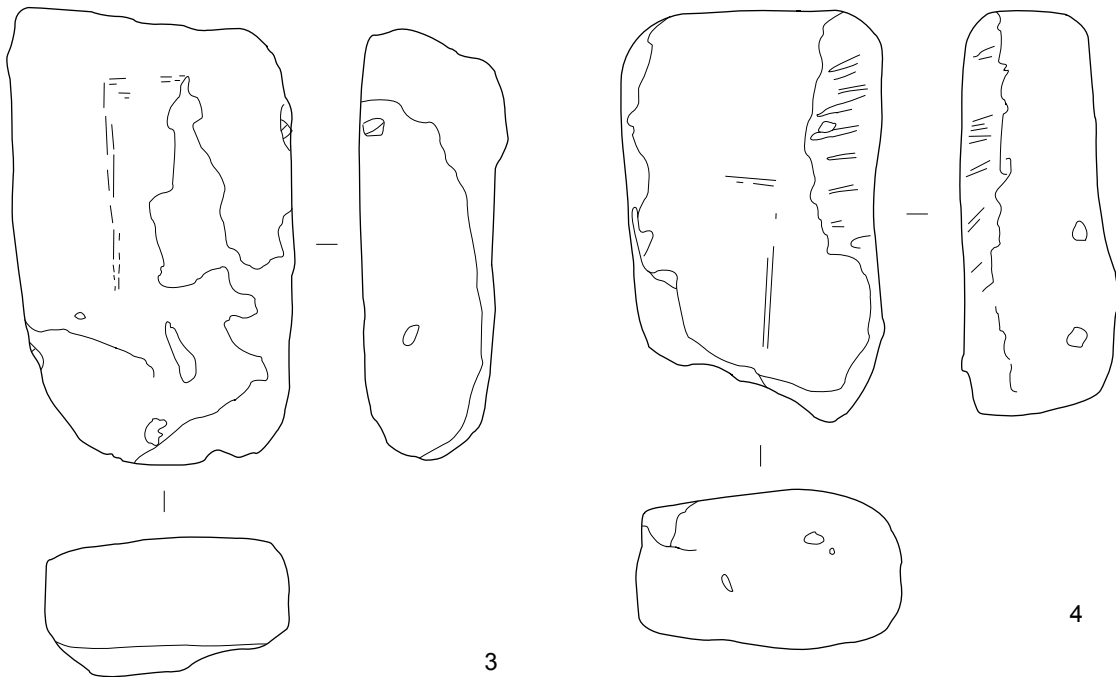
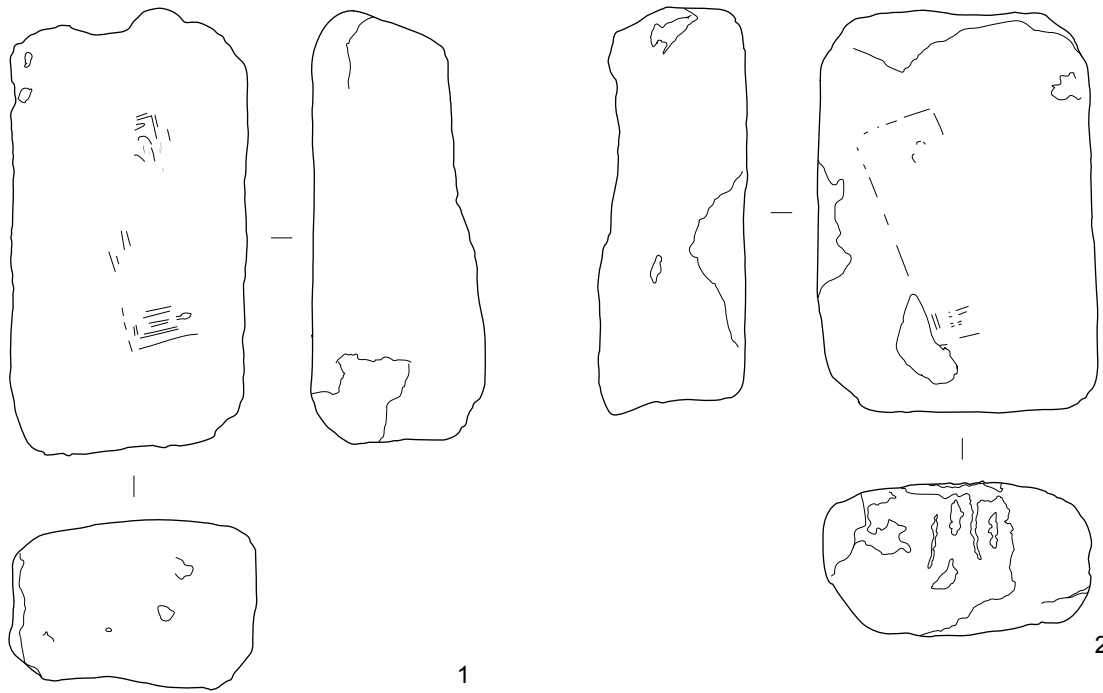


図28 シャフト108 出土日乾燥瓦
 Fig.28 Mud bricks from Shaft 108

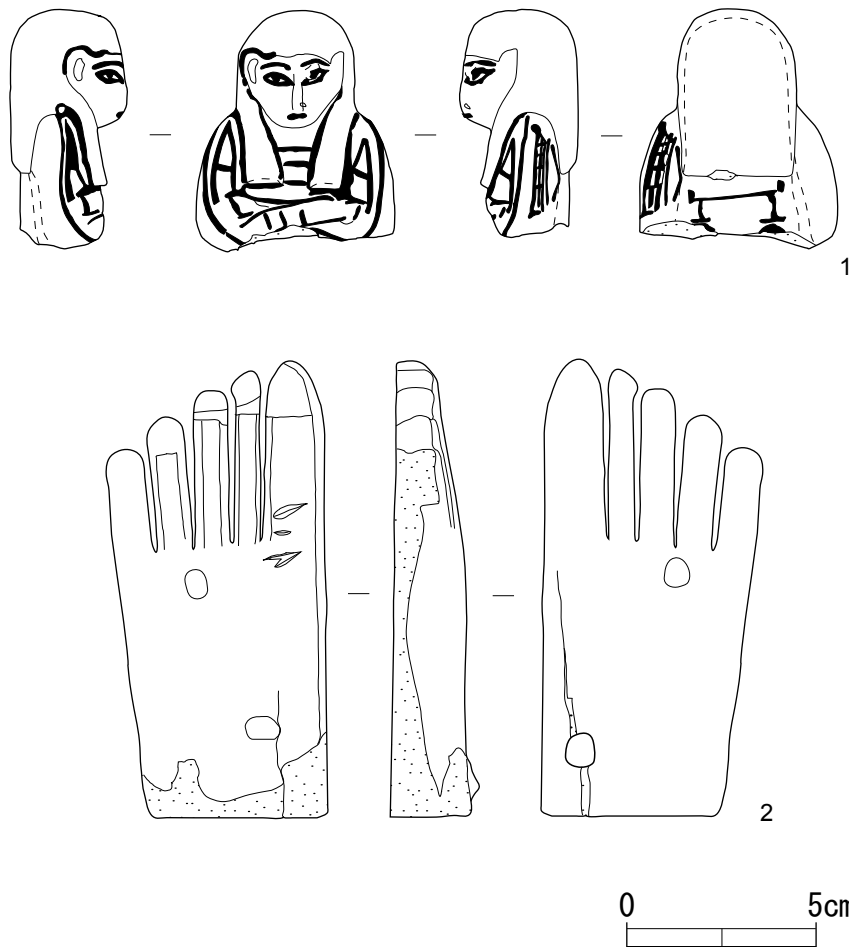


図29 シャフト108出土遺物
Fig.29 Objects from Shaft 108

出土遺物

a) スタンプ付日乾煉瓦 (図28)

B室入口の封鎖に使用されていた日乾煉瓦であり、どの例も所々失われており摩耗しているが、残存している部分から煉瓦のサイズは長さ約30cm、幅約18.5cm、厚さ約10cmと推測することができる。イパイのトゥーム・チャペルで確認されていたスタンプは縦1行のものと2行のものが確認されており(吉村、近藤他 1998: 115、図7-1)、本例は前者に該当すると考えられる。

b) ファイアンス製シャブティ片 (図29-1)

シャフト部から出土したファイアンス製のシャブティ片であり、下半部は失われている。ファイアンスは青色であり、細部の表現は黒色のラインで描かれていた。類似するファイアンス製シャブティはこれまでも「タ」墓やその周辺のシャフト墓からも出土しており(吉村、近藤他 2005: 117, 写真6; 吉村、馬場他 2009: 12, 図8.1, 写真5; 吉村、近藤他 2011: 74-78, Fig.46, 47, Pl.17)、17次調査でもシャフト79のシャフト部から出土している。

c) 人型木棺片 (図29-2)

C室から出土した、人の左足を象った木片である。第19王朝に類例が認められる生前の姿を表現した着衣型木棺(Niwincki 1988: 12-13; Taylor 1989: 38-39)の、蓋の足部分と推測される。外面は赤褐色に塗られており、肌の表現を意図したものと考えられる。

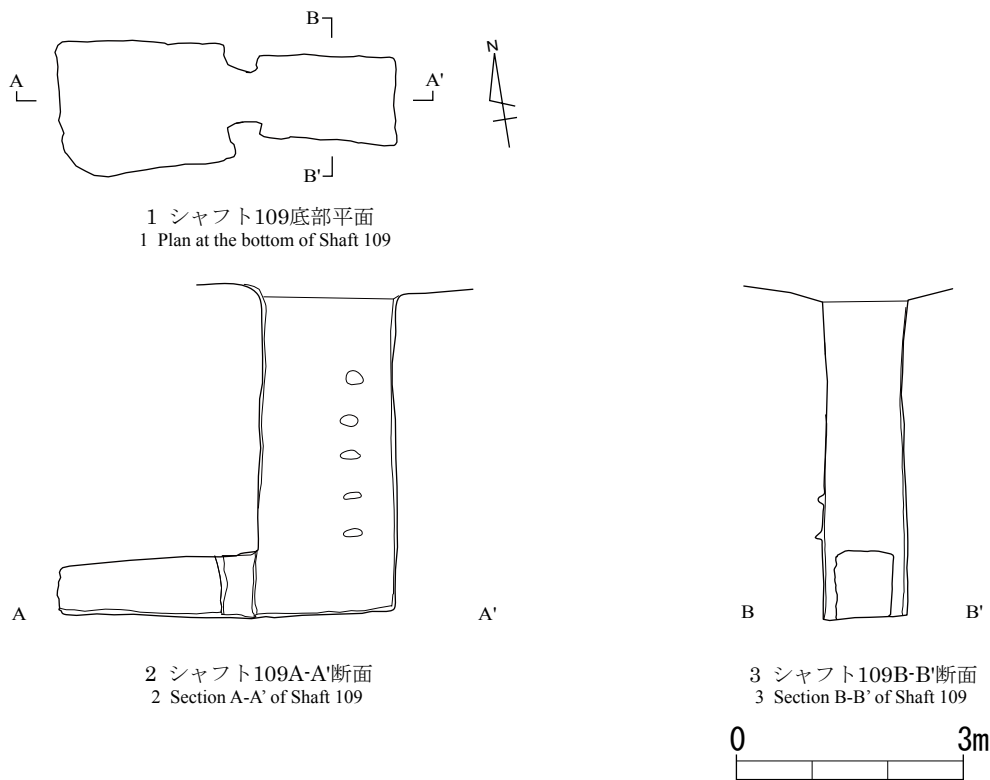


図30 シャフト109平面・断面図
Fig.30 Plan and section of Shaft 109

(4) シャフト109 (図30)

シャフト109はグリッド2E49に位置しており、2008年の第16次調査でシャフトの開口部が確認されていた。開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさが1.1 x 1.8m、シャフト部の深さが4.2mであった。シャフト部からは木棺片、土器片が出土している。

シャフトの最下部から西側に部屋が発見された(A室)。A室の平面はやや東西に長い方形を呈しており、南北1.7m、東西2.2m、床面から天井までの高さが0.7mであった。A室からは石灰岩の石材とともに木製の人型木棺が発見された。人型木棺は右側面を下に向けた状態で細砂層の上から出土しており、蓋の胸より下の部分が外れた状態で出土した。木棺の内部からは何も発見されなかった。その他、わずかではあるが土器片が出土した。

出土遺物

a) 人型木棺 (図31)

A室から発見された人型木棺で、完形に近い状態へ復元することができた。長さ186cm、幅49cm、高さ42cmであり、全体が黄色に塗られ、髪は黒色で横方向に黄色の帯があり、帯の中央から頭頂部にかけても黄色の帯が描かれていた。また、顔の横から下に向かって伸びている髪の毛の房の下端も黄色の装飾が見られる。顔の部分は白色であり、眼、眉は黒色で描かれていた。手が胸の前で交差され、腕のラインは彫刻によって表現されている。胸の部分には襟飾りの輪郭と見られる赤色のラインが書かれていた。このラインは下書きと考えられることから、木棺は未完成の状態で使用されたと推測される。銘文は見られなかった。

全体が黄色に塗られる木棺は第19王朝から第21王朝に見られる(Niwinski 1984: 438-444)。また、蓋部分



図 31 シャフト 109 出土人型木棺
Fig.31 Wooden anthropoid coffin from Shaft 109

が薄く、平坦という特徴があり、同様な例はサッカラのイウルデフ墓から出土した木棺に類似する例が見られ、ラメセス王朝期後期から第21王朝もしくは第22王朝初期という年代が与えられている (Raven 1991: 23)。

(5) シャフト110 (図14)

シャフト110はグリッド2E48に位置しており、2008年の第16次調査で発掘が行われた結果、「イリセルアア」と「タウブパウマアト」の2人の二重人型木棺による埋葬が発見された。第16次調査では埋葬室内の木棺を取り上げ、砂層の除去を行った状態で調査を終えており、A室にはタフラの堆積と石灰岩片、日乾煉瓦が残っていた。第17次調査ではこのタフラ層の除去と石灰岩片、日乾煉瓦の取り上げを実施した。

結果として、黒色の木製シャブティ片が発見された。シャブティは足部が失われており、名前は確認できなかった。第16次調査で発見されたタウブパウマアトのものと形状が酷似しており、イリセルアアのものとはすべてシャブティ・ボックスに入れられた状態で発見されたことから、タウブパウマアトに属するものと考えられる。

IV. おわりに

第16次・第17次調査では「タ」の墓周辺の発掘区を北側に拡張し、北側の墓を中心に発掘を実施した。中王国時代のシャフト墓では、ファイアンス製の小像やファイアンス製のカバ像など、ダハシュール北遺跡にはこれまでになかった副葬品を発見することができた。また、シャフト79、シャフト82、シャフト107からは数多くのビール壺が完形で出土した。ビール壺は既往の研究成果によって頸部の形状が年代を推測する手がかりとなり、今回の例では第13王朝初期という年代が得られた。今後中王国時代における墓域の発展過程や埋葬習慣の経年変化などを追っていく上での軸となることが期待される。

第16次と第17次調査の成果で特筆すべきは、シャフト110の埋葬の発見だろう。未盗掘ではないものの、「イリセルアア」と「タウブパウマアト」の二重の人型木棺が比較的良好な残存状態で発見されたことに加え、木製シャブティが入った状態の完形の木製シャブティ・ボックスや、大量の木製シャブティ、木製カノボス壺、アンフォラを発見することができた。アンフォラは第20王朝に年代づけられるものであり、木棺やシャブティ・ボックス、シャブティの年代観とも矛盾しない。「イリセルアア」と「タウブパウマアト」の木棺やシャブティの銘文の書かれる方向は対になっており、最初から計画的に製作された副葬品であった可能性が指摘された。熟年男性と老年女性の2体の人骨が発見されていることから、2人の人物が夫婦関係であった可能性は高い。メンフィス地域での第20王朝の埋葬が良好な状態で残存している例は稀少という事実だけでなく、当時の埋葬習慣に関しても興味深い知見を提供してくれており、資料的価値は極めて高いと言える。

「タ」の墓の周辺で集約的に発掘を行ってきたことで、墓域の西端における様相が明らかになりつつある。今後も調査継続することで、墓域全体の形成過程や埋葬習慣を考察するための資料を蓄積していきたい。

註

- 1) 第16次調査は2008年11月5日から12月5日にかけて行われた。隊員構成は以下の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、馬場匡浩、澤井計宏、秋山淑子、高橋想、堀内則子、半田竜介、建築学班：柏木裕之、地質学班：岩崎好規、中川康一、保存修復班：青木繁夫、サイバー大学世界遺産学部実習生：江頭真理子、川村由恵、帝原瑠紫明、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 2) 第17次調査は2009年6月17日から7月11日にかけて行われた。隊員構成は以下の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、長屋憲慶、高橋想、北村玲、堀内則子、建築学班：西本真一、人類学班：平田和明、サイバー大学世界遺産実習生：小栗孝昌、鬼丸洋之、小野寺元気、川村由恵、瀬尾重乃、武石美徳、帝原瑠紫明、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。

- 3) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している (Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 4) シャフトの地下室に脇柱とまぐさによって戸口を作る例は、2008年第15次調査で発掘したシャフト86でも発見されている (吉村、近藤 2011: 61-65, 図.38)。
- 5) 同名の人物のステラがシャフト17から発見されている (吉村、近藤他 1999: 143, 写真5-4)。
- 6) 碑文の翻訳については早稲田大学の河合望氏にご教授いただいた。
- 7) 中王国時代の墓の壁画で頻りに描かれていたビール醸造の場面では、ビールを貯蔵するための容器が描かれており、同じ器形の土器が実際に遺跡から出土している。土器に *hnkt* (ビール) と書かれていた例や、供物卓に同様の器形が描写されており、*hnkt* と文字が付されている例があることから、「ビール壺」と呼ばれるに至った (Szafranski 1998: 96-97)。
- 8) Do. アーノルド (Arnold) は中王国時代の「ビール壺」の頸部を用いて、形状の定量的な分析を行い、年代について考察している (Do. Arnold 1988: 141-143, 図.76)。頸部の最もくびれている径 (最小径) を a、口縁の最上部の径を b とし、頸部の最小径の位置から口縁までの高さを c とし、 $a/b \times 100$ の数値 (頸部のくびれ度数、Aperture Index) を横軸に、c の数値 (頸部の長さ) を縦軸として、各土器の数値をプロットした図を作成し、年代と数値に一定の相関があることを示した。Do. アーノルドの研究で、制作時期が確かなものとして年代決定に利用された資料は第12王朝から第13王朝初期のものまでであり、それより後の例については触れられていない。一方で、テル・エル＝ダバアの資料を用いて、口縁部の最大径と、口唇部の厚みの数値から年代を検討している研究もあり、こちらは第12王朝後期から第2中間期までが含まれている (Szafranski 1998)。本報告では前者のインデックスを AI (Aperture Index) 1、後者を AI2 として、第16、17次調査で出土した「ビール壺」の数値を記述し、前述の2つの研究成果と比較することで、年代について検討する。シャフト82では AI1 が 79～83 で頸部の長さが 5.5～6.5cm、AI2 は 510～611 であり、前述の研究結果と比較すると第12王朝末から第13王朝初期に相当すると考えられる。
- 9) 聖マリヤンナ医科大学の平田和明教授 (解剖学) の観察所見による。
- 10) サッカラのイウルデフ墓では黒色の木棺でもラメセス王朝後期に年代づけられた例がある (Raven 1991: 23, 31)。これに対し、イウルデフ墓の例はもっと後の時代のものであり、第25王朝後期から第26王朝初期に年代づけられるとした研究成果もある (Niwinski 1996: 363)。
- 11) リシュトでこれらのファイアンス製小像群が出土したシャフトは Shaft 29/39 と Shaft 29/40 であり、前者は共伴する土器から第12王朝後期から第13王朝に年代づけられるが、後者は第12王朝初期から新王国時代以降とされており、年代については明確ではない (Arnold 1992: 45)。
- 12) ファイアンス製カバ像の使用が開始された年代については議論が行われており、定まってははいない (Lacovara 1988: 127, note.3)。
- 13) シャフト79出土のビール壺に対して註7のインデックスを適用すると、AI1 は 78～96、頸部の長さが 4.2～5.0cm であり、Do. アーノルドによって作成された数値のプロット図 (Arnold 1988: fig.76) で認められる4つのクラスターのどれにも当てはまらない。一方、AI2 では 381～545 (平均 483) という数値を示しており、テル・エル＝ダバアの d/1 層に近い数値であるといえる。d/1 層は第13王朝初期に相当する (Szafranski 1998: 101-102, Fig.4, Fig.5)。
- 14) Do. アーノルドは「ベッセル・インデックス」を用いて、中王国時代に典型的な半球形碗形土器の年代を特定しており、年代についてはこの研究を参照した。このベッセル・インデックスとは半球形碗形土器の最大径を a、器高を b とした場合、 $a/b \times 100$ によって得られる数値であり、数値と年代に相関が見られることが分かっている。第12王朝後期から第13王朝初期にはおよそ 190～150 の値を示し、第13王朝中期以降は 120 前後で 145 は超えないとされている (Arnold 1988: 140)。図 26-13 は 165、図 26-14 は 144 であり、後者はやや低い値を示すものの、120 からは遠く、150 に近いことから、両者を第12王朝後期～第13王朝初期とした。
- 15) シャフト107出土のビール壺に対して註7のインデックスを適用すると、AI1 は 84～99、頸部の長さが 4.5～8.0cm であり、Do. アーノルドによって作成された数値のプロット図 (Arnold 1988: 142-143, fig.76) で認められるクラスター4 (第12王朝末～第13王朝初期) にやや近い値を示す。一方 AI2 については 418～688 (平均 516) であり、テル・エル＝ダバアの d/1 層と極めて近い値を示す。d/1 層は第13王朝初期に相当することから、シャフト107出土のビール壺は第13王朝初期とした。

参考文献

Arnold, Di.

1992 *The South Cemeteries of Lisht, vol 1: The Pyramid Complex of Senwosret I*, New York.

Arnold, Do.

1988 "Pottery," in Arnold Di., *The South Cemeteries of Lisht*, vol 1: *The Pyramid of Senwosret I*, New York, pp.106-149.

Aston, D.A.

1994 "The shabti box: a typological study," *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 74, pp.21-54.

2004 "Amphorae in New Kingdom Egypt," *Ägypten und Levante* XIV, pp.175-213.

Brunton, G. and Engelbach, R.

1927 *Gurob*, London.

Engelbach, R.

1915 *Riqqeh and Memphis* VI, London.

1923 *Harageh*, London.

Freed, R.E., Berman, L.M., Doxey, D.M. and Picardo, N.

2009 *The Secrets of Tomb 10A: Egypt 2000 B.C.*, Boston.

Fuscaldo, P.

2003 "Tell al-Dab'a: Two Execration Pits and a Foundation Deposit," in Hawass, Z, (ed.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century*, Volume 1, Cairo, New York, pp.185-188.

Hope, C.

1987 "Innovation in the Decoration of Ceramics in the mid-18th Dynasty," *Cahiers de la céramique Égyptienne* I, pp.97-122.

1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Melbourne.

Ikram, S. and Dodson, A.

1998 *The Mummy in Ancient Egypt: Equipping the Dead for Eternity*, New York.

Kemp, B.J. and Merrillees, R.S.

1980 *Minoan Pottery in Second Millenium Egypt*, Mainz am Rhein.

Lacovara, P.

1988 "58 Hippopotamus," in D'Auria, S., Lacovara, P. and Roehrig, C.H. (eds.), *Mummies & Magic: Funerary Arts of Ancient Egypt*, Boston, p.128.

Martin, G.T.

1985 *The Tomb-chapels of Paser and Ra'ia at Saqqara*, London.

1991 *The Hidden Tombs of Memphis*, London.

2001 *The Tombs of Three Memphite Officials: Ramose, Khay and Pabes*, London.

Niwinski, A.

1984 "Sarg NR-SpZt," *Lexikon der Ägyptologie* V, Wiesbaden, pp.434-468.

1988 *21st Dynasty coffins from Thebes: Chronological and typological studies*, Mainz am Rhein.

1996 "Coffins from the Tomb of Iurufef-A Reconsideration. The Problem of Som Crude Coffins from the Memphite area and Middle Egypt," *Bibliotheca Orientalis* 53, pp.324-363.

Nordström, H.A. and Bourriau, J.

1993 "Ceramic Technology: Clay and Fabrics," in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.

Petrie, W.M.F.

1891 *Illahun, Kahun, and Gurob*, London.

1896 *Koptos*, London.

Petrie, W.M.F., Brunton, G. and Murray, M.A.

1923 *Lahun* II, London.

Raven, M.J.,

- 1991 *The Tomb of Iurudef: a Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London.
Rose, P.J.
- 2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London
Schneider, H.D.
- 1977 *Shabtis I-III*, Leiden.
- 1996 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tutankhamûn, II: A Catalogue of the Finds*, Leiden and London.
Szafranski, Z.E.
- 1998 “Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from tell El-Dab’a,” *Ägypten und Levante* VII, pp.95-119.
Taylor, J.H.
- 1989 *Egyptian coffins*, Aylesbury.
- 2001 “Patterns of colouring on ancient Egyptian coffin from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty:an overview,” in Davies, W.V. (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt*, London, pp.164-181.
Vila, A.
- 1963 “Un depot de textes d’envoutement au Moyen Empire,” *Journal des Savants* 153, No.3, pp.135-160.
吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一
- 1999 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告―1998年 第3次調査―」、『人間科学研究』第12巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.137-149。
吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、馬場匡浩、中川武、西本真一、柏木裕之
- 2005 「エジプト 早稲田大学ダハシュール北地区発掘調査報告 ―2004年 第9次調査―」、『人間科学研究』第18巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.109-118。
吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
- 2011 「Ⅱ. 第14次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60。
吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
- 2011 「Ⅲ. 第15次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83。
吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、秋山淑子
- 2009 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第10次・第11次発掘調査―」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-38。
吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤健
- 2010 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第12次・第13次発掘調査―」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46。

エジプト学研究 第18号

2012年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.18

Published date: 31 March 2012

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University